



Agilent OpenLab CDS Workstation Plus
(Secure Storage 付き)

インストールおよびコンフィグレーション

注意

文書情報

文書番号：D0028021ja Rev. B
エディション: 2024年11月

著作権

© Agilent Technologies, Inc.
2015-2024

本マニュアルの内容は米国著作権法および国際著作権法によって保護されており、Agilent Technologies, Inc. の書面による事前の許可なく、本書の一部または全部を複製することはいかなる形態や方法（電子媒体への保存やデータの抽出または他国語への翻訳など）によっても禁止されています。

Agilent Technologies, Inc.
5301 Stevens Creek Blvd.
Santa Clara, CA 95051,
USA

ソフトウェアリビジョン

このガイドは改訂版が発行されるまで、OpenLab CDS のリビジョン 2.8 に対応しています。

このマニュアルのすべてのファイルパスは、区切り文字としてバックslash (\) で表示されます。これは円記号と同等で、日本語の Windows オペレーティングシステムと完全に互換性があります。

保証

このマニュアルの内容は「現状有姿」提供されるものであり、将来の改訂版で予告なく変更されることがあります。Agilent は、法律上許容される最大限の範囲で、このマニュアルおよびこのマニュアルに含まれるいかなる情報に関しても、明示黙示を問わず、商品性の保証や特定目的適合性の保証を含むいかなる保証も行いません。Agilent は、このマニュアルまたはこのマニュアルに記載されている情報の提供、使用または実行に関連して生じた過誤、付随的損害あるいは間接的損害に対する責任を一切負いません。Agilent とお客様の間に書面による別の契約があり、このマニュアルの内容に対する保証条項がここに記載されている条件と矛盾する場合は、別に合意された契約の保証条項が適用されます。

技術ライセンス

本書で扱っているハードウェアおよびソフトウェアは、ライセンスに基づき提供されており、それらのライセンス条項に従う場合のみ使用または複製することができます。

権利の制限

米国政府の制限付き権利について: 連邦政府に付与されるソフトウェアおよび技術データに係る権利は、エンドユーザーのお客様に通例提供されている権利に限定されています。Agilent は、ソフトウェアおよび技術データに係る通例の本商用ライセンスを、FAR 12.211 (Technical Data) および 12.212 (Computer Software) 、並びに、国防総省に対しては、DFARS 252.227-7015 (Technical Data -Commercial Items) および DFARS 227.7202-3 (Rights in Commercial Computer Software or Computer Software Documentation) の規定に従い提供します。

安全にご使用いただくために

注意

注意は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、製品の破損や重要なデータの損失に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**注意**を無視して先に進んではなりません。

警告

警告は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、人身への傷害または死亡に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**警告**を無視して先に進んではなりません。

目次

本書の内容 6

1 PC の準備 7

Windows のインストールおよび更新 8

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール 10

System Preparation Tool の実行 12

2 OpenLab CDS Workstation Plus のインストール 15

インストールワークフローの概要 16

OpenLab CDS のインストールを開始する前に 18

OpenLab インストーラの実行 20

サイレントインストール 25

ドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード 29

3 インストール後のタスク 32

ソフトウェアインストール後のソフトウェアベリフィケーション 33

ウィルス対策プログラムの設定 34

集中管理された出力先の準備 37

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備 39

4 オプションの手順 43

OpenLab Help and Learning のみインストール 44

オフラインマシンのパフォーマンス向上 45

NIST ライブラリ検索の設定 46

セキュリティ保護されたストレージパスの変更 47

5 ライセンス 48

OpenLab CDS ライセンスについて 49

ライセンスの取得 51

ライセンスのインストール 56

6	OpenLab CDS Workstation Plus のコンフィグレーション	58
	OpenLab Control Panel	59
	認証の設定	60
	セキュリティポリシーの設定	62
	ユーザーおよびロールの設定	63
	初期プロジェクトの設定	68
	初期機器のコンフィグレーション	69
	コントロールパネルのその他の設定	70
7	OpenLab CDS ソフトウェアについて	71
	ソフトウェアアーキテクチャ	72
	21 CFR Part 11 のコンプライアンス	76
	カスタマイズ	78
8	システム設定およびメンテナンス	80
	コントロールパネル	81
	Shared Services メンテナンス	82
	バックアップとリストアに関する重要な情報	83
	バックアップ手順	87
	リストア手順	97
	ルーチンメンテナンス	105
	トラブルシューティング	106
9	OpenLab CDS バージョン 2.8 へのアップグレード	108
	ライセンスアップグレード	109
	OpenLab CDS Workstation Plus を最新バージョンへアップグレード	112
	アップグレード後のタスク	117
	新規または更新された項目	118
10	OpenLab CDS のアンインストール	119
	OpenLab CDS のアンインストール	120
	OpenLab Help and Learning のみアンインストール	121
	トラブルシューティングのヒント	122

11 付録 123

コントロールパネルの権限 124

営業およびサポートのお問い合わせ先 135

本書の内容

このドキュメントには、OpenLab CDS Workstation Plus（Secure Storage 付き）のインストール手順、コンフィグレーション、管理、およびメンテナンスの方法が記載されています。SubscribeNet からのライセンス作成とオペレーティングシステムの設定に関する情報も記載しています。

表 1: 本書で使用される用語と略語

用語	説明
Secure Storage	データベースを含む分析データを管理するための OpenLab サーバーのコンポーネント。クライアント/サーバーシステムでは常に使用しますが、ワークステーションではオプションです。
AIC	Agilent の分析機器コントローラ
コントロールパネル	Agilent OpenLab ソフトウェア用コントロールパネル
Microsoft コントロールパネル	Microsoft Windows オペレーティングシステムの一部
Shared Services	OpenLab CDS のセキュリティポリシーやコンフィグレーションの一元管理などを制御する一連の管理サービス。Shared Services にはコントロールパネルからアクセスします。



1 PC の準備

Windows のインストールおよび更新 8

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール 10

System Preparation Tool の実行 12

Windows のインストールおよび更新

- 1 インストールメディアにある **Setup\Docs** フォルダから『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v2.8_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』にアクセスします。設定がネットワーク要件に従っていることを確認し、使用するハードウェアとソフトウェアがこのシステムでサポートされるかどうかを判断します。
- 2 DNS サーバーがコンピューター名を解決できるように、プロトコルのインターネット標準 (RFC952) に従い以下の文字で構成してください。
 - 文字 (a-z、A-Z)
 - 数値 (0-9)
 - ハイフン (-)

注記

下線（アンダースコア）は使用しないでください。コンピューター名に下線が含まれていると、インストールはできません。

コンピューター名はライセンスに反映されます。OpenLab CDS のインストール後はコンピューター名を変更しないことを推奨します。

注記

インストール後にホスト名を変更することはお勧めしません。作業が煩雑で特別な操作が必要となります。ホスト名の変更が必要な場合は、Agilent のサポート担当にお問い合わせください。

- 3 Microsoft インストールメディアまたは IT 部門により提供された適格な PC イメージメディアから Windows オペレーティングシステムをインストールします。設定時に、コンピューター名、管理者のパスワード、およびネットワークの設定を指定します。

システムを既存のドメインに参加させるか、ワークグループモードに設定するか選択します。ドメイン命名が RFC-1034 と一致している必要があります。

- 4 Windows の推奨バージョンに更新します。OpenLab CDS ページの [Windows のアップグレード FAQ](https://www.agilent.com/) セクションを参照してください (<https://www.agilent.com/> から「Windows upgrade」を検索)。

注記

Agilent は、OpenLab CDS のインストール後、Windows 製品のインプレースアップグレード（Microsoft Windows 10 から Microsoft Windows 11）はサポートしていません。

PC の準備

Windows のインストールおよび更新

- 5 Windows 品質更新プログラムを確認し、重要なセキュリティパッチをすべて適用します。Windows の最新バージョンのインストールは選択しないでください（前のステップを参照）。OpenLab CDS のインストールを続行する前に、Windows 品質更新プログラムが完了していることを確認してください。
- 6 Windows の設定で、**時計と地域** > **日付と時刻**を開きます。地域のタイムゾーンを選択します。

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール

システムに .NET 3.5 および .NET 4.x がインストールされていない場合、System Preparation Tool またはインストールウィザードによって自動的にインストールされます。システムの再起動が必要な場合があります。インストール中のシステム再起動を避けるには、事前に .NET をインストールしてください。

注記

この作業には、インターネット接続が必要です。期待どおりに機能しない場合や、コンピューターがインターネットにアクセスできない場合は、.NET 3.5 を手動でインストールしてください。Microsoft では複数のインストールオプションを提供しています。詳細については、以下を参照してください。

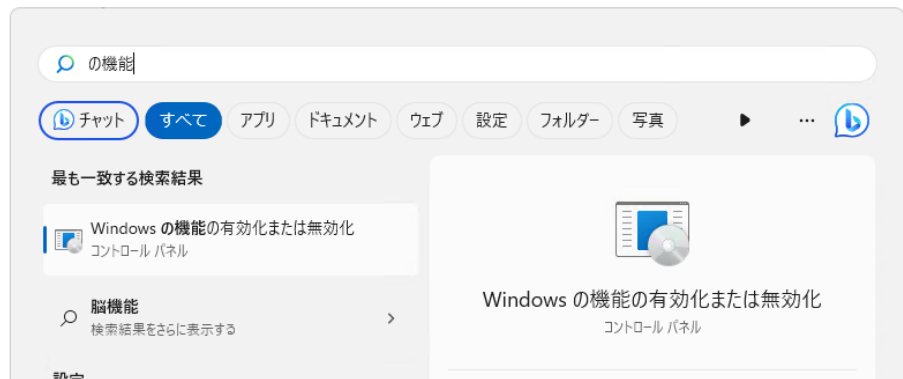
<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-hardware/manufacture/desktop/deploy-net-framework-35-by-using-deployment-image-servicing-and-management-dism>

あるいは、

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/dotnet/framework/install/dotnet-35-windows?view=windows-11>

- 1 Windows のスタートメニューで、Windows の機能の有効化または無効化を検索します。

Microsoft コントロールパネルで検索結果を開きます。



PC の準備

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール

- 2 以下のように .NET 3.5 を有効にします。
 - a .NET Framework 3.5 (.NET 2.0 および 3.0 を含む) ノードを展開します。
 - b Windows Communication Foundation 非 HTTP アクティブ化チェックボックスを選択します。

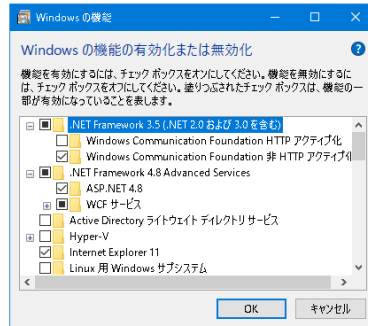


図 1: .NET 3.5 を有効にする (Win 11)

- 3 NET Framework 4.8 Advanced Services をチェックボックスを選択します。サブアイテムに対しては、既定値を使用します。

注記

Transport Layer Security (TLS) プロトコルの確認

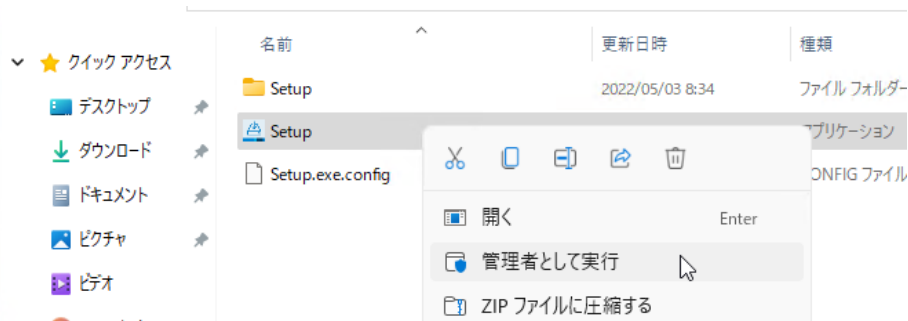
TLS 1.2 (以降) ではさまざまな暗号スイートをサポートしており、それらのうちの一部は攻撃に対して脆弱な可能性があります。OpenLab CDS ではすべての TLS 1.2 (以降) の暗号スイートをサポートしており、お客様の IT ポリシーによって脆弱な暗号スイートが無効化されても影響はありません。古い Transport Layer Security (TLS) セキュリティプロトコル TLS 1.0、TLS 1.1、および SSL 3.0 は OpenLab CDS では不要となり、セキュリティ上のリスクがあります。Microsoft の説明およびお客様の IT ポリシーに従ってこれらが無効にしてください。

一部の OpenLab CDS コンポーネントでは Microsoft .Net 3.5 が必要です。デフォルトでは、このバージョンのフレームワークでは TLS 1.2 以降の使用を必須としていません。ほとんどの IT 環境では、TLS 1.2 は .Net 4.5 以前のフレームワークで有効となっています。これらを変更するスクリプトが、インストールメディアの `\Setup\Tools\Support\TLS\FixTLSVersions.ps1` です。スクリプト実行については、システム管理者にお問い合わせください。

System Preparation Tool の実行

System Preparation Tool (SPT) を実行すると、Windows の設定を確認してマシンに適用します。OpenLab インストーラを実行すると、これらの設定を自動的に適用します。事前に SPT を実行するとインストールプロセスが短縮され、PC の再起動が回避されます。必須設定と推奨設定の概要は、『[OpenLab CDS の要件とサポートする機器 \(CDS_v2.8_Requirements.ja.pdf, D0028027ja\)](#)』の System Preparation Tool の章を参照してください。

- 1 オプション：USB メディアのファイルをすべてローカルドライブまたは指定されたフォルダーにコピーし、USB メディアを PC から外します。
- 2 インストーラを開くには、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。



注記

Windows のユーザーアカウント制御 (UAC) をオンにしている場合は、作業の続行を明示的に確認しなければなりません。

- 3 スタート画面で OpenLab CDS を選択し、OK をクリックします。



- 4 プランタブから、System Preparation Tool を選択します。



System Preparation Tool ウィンドウが開きます。

- 5 ドロップダウンリストから製品コンフィグレーション
OpenLab CDS~WorkstationPlus~Win10 または
OpenLab CDS~WorkstationPlus~Win 11
を選択し、続行をクリックします。

インストーラが必須の Windows 設定をすべて自動的に適用して確実にインストールを実行します。

- 6 システムに適用する推奨設定を選択します。

推奨設定によってシステムのパフォーマンスと安定性を向上できますが、アプリケーションを展開するために完了させる必要はありません。必須設定の後に推奨設定が表示されます。

推奨設定のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はオフにできません。推奨アクションがデフォルトで選択されており、オフにしないとこれらのアクションが適用されます。

7 修正の適用をクリックして正しい設定を適用します。

System Preparation Tool により選択した設定が更新され、新しいステータスが**コンフィグレーションの更新**ページに表示されます。すべてのアクションがログファイルに保存されます。ログファイルへのリンクがページの下部にあります。

8 次へをクリックしてSYSTEM PREPARATION レポートページへ進みます。

SYSTEM PREPARATION レポートが表示されます。選択したすべての設定の新しいステータスが一覧表示されます。

SYSTEM PREPARATION レポートがディスクに保存されます。ページの上部に保存場所が表示されます。

9 レポートの印刷をクリックして SYSTEM PREPARATION レポートを印刷します。

Adobe PDF プリンターを使用してファイルなどに出力したり、コメントを追加したりできます。

10 SYSTEM PREPARATION レポートには、System Preparation Tool によって自動的に更新されない必須設定や推奨設定が表示されます。SYSTEM PREPARATION レポートの必要な操作**セクションで指定された指示に従って、オペレーティングシステムの設定を手動で更新します。**

11 完了をクリックします。

12 要求された場合はシステムを再起動します。

2

OpenLab CDS Workstation Plus のインストール

インストールワークフローの概要 16

OpenLab CDS のインストールを開始する前に 18

OpenLab インストーラの実行 20

サイレントインストール 25

インストールパラメータのエクスポート 25

インストールの実行 25

リターンコード 26

ログおよびトレース 28

ドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード 29

アドオンドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード 29

OpenLab CDS にドライバーソフトウェアを登録 30

インストールワークフローの概要

準備

- 詳細は『OpenLab CDS 要件ガイド』を参照
- System Preparation Tool を実行



インストール

1. インストールウィザードの実行
(ソフトウェアベリフィケーションを含める)
2. インストール後に：
集中管理された出力先の準備
3. オプション：
オフラインマシンのパフォーマンス向上



ライセンスの取得

1. SubscribeNet からライセンスを取得
2. ライセンスのインストール

- インストール時の再起動を回避するため、インストールを開始する前に System Preparation Tool を実行してください。 [System Preparation Tool の実行](#) 12 ページを参照してください。
- スクリプトを使用してインストールする場合は、[サイレントインストール](#) 25 ページを参照してください。

- [OpenLab CDS Workstation Plus のインストール](#) 15 ページを参照してください。
- [インストール後のタスク](#) 32 ページを参照してください。
- [オプションの手順](#) 43 ページを参照してください。

[ライセンス](#) 48 ページを参照してください。



コンフィグレーション

- 認証の設定
- プロジェクトの設定
(監査証跡設定を含む)
- 機器の設定

OpenLab CDS Workstation Plus
のコンフィグレーション 58 ページを参照してください。

コンフィグレーションタスクは
コントロールパネルで実行しま
す。

詳細については、[OpenLab Help & Learning](#) の「コントロールパネル」セクションを参照してくだ
さい。

OpenLab CDS のインストールを開始する前に

OpenLab CDS の以前のバージョンからアップグレードする場合は、[OpenLab CDS バージョン 2.8 へのアップグレード](#) 108 ページを参照してください。

- 1 ケーブル、検出器、通信ケーブルなど、必要なハードウェアをすべて接続します。Agilent 以外の機器では、GPIB インターフェイスが必要な場合があります。
- 2 .NET 4.x の場合に「名前付きパイプのアクティブ化」が選択されていることを確認します。
 - a Windows のスタートメニューで、Windows の機能の有効化または無効化を検索します。
 - b Microsoft コントロールパネルで検索結果を開きます。
 - c .NET Framework 4.8 Advanced Services を展開します。
 - d WCF サービスを展開します。
 - e 名前付きパイプのアクティブ化を選択します。

- 3 『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v2.8_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』の「ファイアウォールの設定」に記載されたファイアウォールポートを必ず開いてください。

Windows コマンド **netstat -aon** を使用して、コンピューターがリスニング状態のすべてのアクティブポートと、シャットダウンに必要な各プロセス ID (PID) を表示します。

TCP ポート 80 および 443 が利用できることを確認してください。

注記

これらのポートが他のプログラムで使用されている場合：

World Wide Web Publishing サービスのスタートアップの種類を**手動**または**無効**に設定するか、**インターネットインフォメーションサービス** (Internet Information Services = IIS) を**無効**にします。

コマンド **net stop http** は、HTTP サービスに依存し、かつ停止されるすべてのサービスが一覧表示されます。これらのいずれかを無効にすることが必要な場合があります。

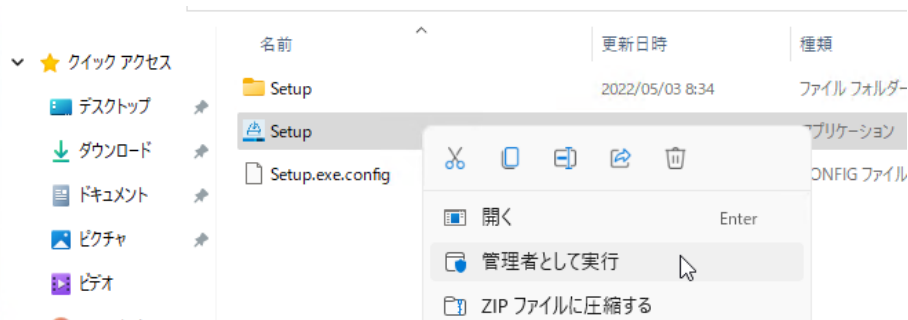
- 4 システムをウイルスから保護します。
 - a ウィルス対策プログラムをインストールします。
 - b インストールを行う間は、ウイルス対策ソフトウェアを無効にしてください。
 - c Trend Micro™ をウイルス対策ソフトウェアとして使用する場合、**Web レピュテーション** をオフにして、すべてのコンポーネントのインストールを許可します。
- 5 すべてのコンポーネントを正常にインストールおよびアクティベーションできるようにするため、LAN ケーブルが接続され、ネットワークが利用できていることを確認してください。ローカルネットワークで十分です。ネットワークケーブルを接続せずにワークステーションをインストールした場合、Secure Storage コンポーネントのアクティベーションが失敗し、データベースを実行しようとするエラーが返されます。
- 6 インストールを実行する管理者権限を持ったローカル管理者アカウントを準備します。PC がドメインの場合、ローカルの管理者グループに所属しているドメインユーザーを準備します。

デフォルトでは、Windows の **プログラムのデバック** 権限がすべてのユーザーに付与されています。この権限を削除しないでください。
OpenLab CDS ソフトウェアのインストールに必要です。

OpenLab インストーラの実行

このセクションでは、ソフトウェアの新規インストールについて説明します。既存の OpenLab CDS インストールのアップグレードの情報については、[OpenLab CDS バージョン 2.8 へのアップグレード 108 ページ](#)を参照してください。

- 1 インストーラを開くには、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。



- 2 スタート画面で OpenLab CDS を選択し、OK をクリックします。



OpenLab CDS Workstation Plus のインストール

OpenLab インストーラの実行

- 3 インストールタブで、OpenLab CDS Workstation Plus をクリックします。



- 4 使用許諾契約書：Agilent の使用許諾条件を読んで確認します。次へをクリックします。
- 5 インストールフォルダー：OpenLab CDS のインストールフォルダーを指定します。ドライブのルートフォルダーは使用しないでください。次へをクリックします。
- 6 Secure Storage :

Shared Services 'Admin' ユーザーパスワード：コントロールパネルに管理者 (admin ユーザー) としてログインするためのパスワードです。

PostgreSQL データベースのユーザーパスワード：PostgreSQL データベースに管理者 (postgres ユーザー) として直接ログインするためのパスワードです。

注記

パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

次へをクリックして続行します。

- 7 コンポーネント資格情報：ソフトウェアコンポーネントで使用するパスワードを入力します。既存のパスワードが要件を満たしていない場合、新しいパスワードの入力を求められる場合があります。

パスワードは以下の一般的なガイドラインに従う必要があります。

- 最小 8 文字
- 大文字 1 文字以上
- 小文字 1 文字以上
- 数値 1 つ以上
- 使用可能な文字のみを含める

使用可能な全文字：

- 大文字 A-Z
- 小文字 a-z
- 数値 0-9
- 特殊文字：!@#\$%^&+_=

注記

パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

次へをクリックして続行します。

8 ストレージロケーション：

ストレージロケーション名：アプリケーションファイルが保存されるコンテンツ管理ロケーションの名前またはラベルを指定します。特殊文字や記号は使用しないでください。

ストレージロケーションパス：デフォルトのファイルストレージロケーションの絶対パスまたは UNC 形式を指定します。

次へをクリックして続行します。

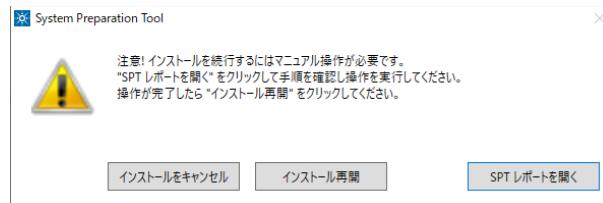
- 9 **システム準備：**システムの推奨設定のリストがインストーラに表示されます。システムに適用する必要のない項目のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はインストール時に自動的に適用されます。必須設定と推奨設定の概要は、『[OpenLab CDS の要件とサポートする機器 \(CDS_v2.8_Requirements_ja.pdf, D0028027ja\)](#)』の System Preparation Tool の章を参照してください。

次へをクリックしてレビューページへ進みます。設定はインストールの一環として適用されます。

- 10 **レビュー：**インストールされるすべてのコンポーネントと、適用されるすべての設定がここに表示されます。

- 今後サイレントインストールを行えるようにプロパティファイルを保存するには（[サイレントインストール](#) 25 ページ を参照）、
コンフィグファイルに保存をクリックします。
- インストールをクリックしてインストールを開始します。

11 オペレーティングシステムでユーザーアクションが必要な場合、以下の警告が表示されます。



続行するオプション

- 推奨設定：SPT レポートを開くをクリックし、必要な操作セクションで更新が必要かどうかを確認します。操作が完了したら、インストール再開をクリックします。
- インストールをキャンセル：インストールが中断されます。必要な更新を行ってインストールを再開します。
- インストール再開：設定が適用されていない場合でも、ダイアログが閉じ CDS コンポーネントのインストールが続行されます。必要に応じて、インストールが完了した後に設定を更新できます。

12 インストール：インストールが完了したら、次へをクリックします。

13 コンフィグレーション：コンフィグレーションツールはバックグラウンドで動作し、コンテンツ管理コンポーネントを設定します。これには約 10 min かかります。完了したら、次へをクリックします。

登録の問題が発生した場合は、ファイアウォールポートがブロックされている可能性があります。たとえば、ポート 80 と 443 が解放されているかどうかを確認してください。World Wide Web 発行サービスによってブロックされている場合は、このサービスを停止してください。

注記

World Wide Web 発行サービスによってポート 80 と 443 がブロックされていない場合：

Windows コマンド `netstat -aon` により、コンピューターがリッスン状態のすべてのアクティブなポートと、シャットダウンに必要な各プロセス ID (PID) が表示されます。コマンド `net stop http` は、HTTP サービスに依存し、かつ停止されるすべてのサービスが一覧表示されます。これらのいずれかを無効にすることが必要な場合があります。

14 完了：

- 適用された Windows 設定のレポートを表示するには、システム準備の下
のリンクをクリックします。設定を手動で適用する必要がある場合、警
告が表示されます。リンクされたレポートに詳細が表示されます。
- すべてが正しくインストールされたことを確認するには、
ソフトウェアベリフィケーションの起動をクリックします¹。
- インストールを完了するには、コンピュータを再起動 チェックボックス
をオンにし、完了をクリックします。

15 インストール中にエラーが発生した場合：

%ProgramData%\Agilent\InstallLogs\<date and time> にあるインストールロ
グファイルを確認します。ProgramData は非表示のフォルダーです。

インストールには、標準の機器ドライバーセットが含まれます。他の機器ドラ
イバーソフトウェアが必要な場合は、別途インストールしてください。アドオ
ンドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード 29 ページ を
参照してください。

¹ 後でこのツールを個別に起動するには、スタートメニュー > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies >
Software Verification Tool を選択します。

サイレントインストール

OpenLab CDS では、インストールのコマンドラインモード（サイレントインストール参照）をサポートしています。このモードは、インストール、アップグレード、アンインストールをサポートしています。サイレントインストールは手動、または LANDesk や HP CM などのソフトウェア管理システムの一部として実行できます。

インストールパラメータのエクスポート

OpenLab インストーラでは、インストールパラメータを XML ファイルへエクスポートし、サイレントインストールで使えるようにする機能をサポートしています。

- 1 OpenLab インストーラを起動します。
- 2 ウィザードの指示に従います。
- 3 レビュー画面に達したら、**コンフィグファイルに保存**をクリックします。
ファイルを適切なロケーションに保存します。ファイルは自動的に .XML ファイルとして保存されます。

サイレントインストールに、XML ファイルを使用できるようになりました。

インストールの実行

準備

- ・ サイレントインストール用の XML ファイルが作成されています。[インストールパラメータのエクスポート](#) 25 ページ を参照してください。
- ・ .Net Framework がシステムにある。システムにない場合は、自動的にインストールします。次に、マニュアルで **承認**を選択して、使用許諾契約書に同意する必要があります。

- 1 USB メディアのコンテンツを共有フォルダーにコピーします。

- 2 XML ファイルを適切なフォルダーにコピーします。
- 3 コマンドプロンプトまたは Power shell プロンプトの実行可能ファイルを右クリックし、管理者として実行します。
- 4 インストールファイルを保存したロケーションに移動します。
例：C:\CDS

- 5 インストールを開始するには、次の構文で CDSInstaller.exe を呼び出します。

```
CDSInstaller.exe -s -norestart CdsProductType="SecureWorkstation"
StorageType="SecStg" -LicenseAccepted=True
-Configfile="<drive>\<path>\<filename>.xml"
```

<Path and Filename> は、作成されたファイルのパスおよびファイル名です。

例：

```
CDSInstaller.exe -s -norestart CdsProductType="SecureWorkstation"
StorageType="SecStg" -LicenseAccepted=True -Configfile="C:
\ConfigFiles\configurationSecStg.xml"
```

このコマンドでは、ユーザーインターフェイスなしで OpenLab インストーラを起動します。

- 6 インストールには約 5 分かかります。インストールのプロセスをチェックするには、
%ProgramData%\Agilent\InstallLogs にあるログファイルを確認してください。

必要なインストールファイルが不足している場合、OpenLab インストーラはログファイルにエントリを作成します。コンポーネントのタイプに応じて、インストールを続行またはロールバックします。このような状況では、エラーコードが返されます。

- 7 インストールが終了したら、PC を再起動します。

リターンコード

コマンドラインモードでインストール、アンインストール、またはアップグレードを行うと、システムから以下の数値コードが返されます。

表 2: リターンコード：失敗

コード	戻り値	理由
ERROR_PROCESS_ABORTED	1067	プロセスが予期せず終了しました。
ERROR_INSTALL_USEREXIT	1602	ユーザーがインストールをキャンセルしました。
ERROR_INSTALL_FAILURE	1603	インストール中に致命的なエラーが発生しました。
ERROR_INSTALL_SUSPEND	1604	インストールが一時停止し、未完了の状態です。
ERROR_INSTALL_ALREADY_RUNNING	1618	別のインストールがすでに実行中です。このインストールを続行する前に、実行中のインストールを完了してください。
ERROR_INSTALL_PACKAGE_INVALID	1620	このインストールパッケージを開けませんでした。アプリケーションベンダーに連絡して、有効な Windows インストーラーパッケージであることを確認してください。
ERROR_FUNCTION_NOT_CALLED	1626	機能を実行できませんでした。
ERROR_PRODUCT_VERSION	1638	この製品の別のバージョンがインストール済みです。このバージョンのインストールを続行できません。この製品の既存のバージョンを設定または削除するには、Windows 設定の [アプリと機能] にある [変更] または [アンインストール] を実行してください。
ERROR_ACCESS_DENIED	5(0x5)	アクセスが拒否されました。
ERROR_NOT_SUPPORTED	50(0x32)	リクエストはサポートされていません。

表 3: リターンコード：再起動が必要

コード	戻り値	理由
ERROR_SUCCESS_REBOOT_INITIATED	1641	インストーラが再起動しました。このメッセージは成功を示します。
ERROR_SUCCESS_REBOOT_REQUIRED	3010	インストールを完了するには再起動する必要があります。このメッセージは成功を示します。ForceReboot アクションが実行されたインストールは含まれません。
ERROR_FAIL_NOACTION_REBOOT	350(0x15E)	システムの再起動が必要なため、アクションは実行されませんでした。

表 4: リターンコード：成功

コード	戻り値	理由
ERROR_SUCCESS	0	アクションは正常に完了しました。
ERROR_SKIP_CONFIGURATION	77	設定手順をスキップします。ユーザーコマンドにより実行が停止しました。
ERROR_NON_VITAL_PACKAGE_FAILED	4010	インストーラの一部が完了しました。重要でないパッケージが失敗しました。

ログおよびトレース

すべての例外、エラー、情報メッセージが
ドライブ:\ProgramData\Agilent\InstallLogs\<date and time> にログされます。
ProgramData は非表示のフォルダーです。

ドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード

以下のドライバーソフトウェアパッケージは、OpenLab CDS と共に自動的にインストールされます。詳細については、『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v2.8_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』を参照してください。

- Agilent GC および GC/MS
- Agilent LC および LC/MS
- Agilent 35900 A/D
- Agilent SS420x
- Agilent Data Player (Virtual Instruments)

その他の機器ドライバーソフトウェアやアドオンソフトウェア、既存のドライバーソフトウェアのアップグレードは、マニュアルでインストールおよびコンフィグレーションする必要があります。機器ドライバーソフトウェアおよびアドオンソフトウェアパッケージは、インストールメディアの **Setup¥Packages¥Add-Ons** フォルダーにあります。

Agilent の最新のドライバーが SubscribeNet で入手できます。ソフトウェアのライセンス管理およびソフトウェアのダウンロードを行うには、ブラウザに次のリンクを貼り付けて SubscribeNet にログインしてください。 <http://agilent.subscribenet.com>。製品リストで、OpenLab Software > OpenLab Agilent Instrument Driversを選択します。

アドオンドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード

- 1 ドライバーのインストーラパッケージを実行し、インストールウィザードに従います。

インストールまたはアップグレード手順の詳細については、各ドライバーのマニュアルを参照してください。

- 2 OpenLab CDS にドライバーソフトウェアを登録します。

OpenLab CDS Workstation Plus のインストール

ドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード

OpenLab CDS にドライバーソフトウェアを登録 30 ページ を参照してください。

OpenLab コンフィグレーションツールは、新たにインストールまたは更新されたすべての機器ドライバーを検出して Shared Services に登録します。新しい機器タイプがコントロールパネルで利用できるようになります。

OpenLab CDS にドライバーソフトウェアを登録

以下の手順は、上記以外のドライバーのインストール後や、任意のドライバーのアップグレード後に実施する必要があります。これらの手順を行うことで、新しいドライバーが OpenLab CDS で利用できるようになります。

- 1 Windows で、スタート > （すべてのアプリ >） Agilent Technologies > OpenLab コンフィグレーションを選択します。

- 2 OpenLab コンフィグレーションツールで、localhost をサーバーホスト名として入力します。

The screenshot shows the 'OpenLAB コンフィグレーション' (OpenLAB Configuration) window. It is divided into three main steps on the left and a detailed instruction panel on the right.

- ステップ 1 - サーバー (Step 1 - Server):** Contains a text input field for 'ホスト名' (Host Name) and a '接続' (Connect) button.
- ステップ 2 - 認証 (Step 2 - Authentication):** Contains three input fields: 'ユーザー名' (Username), 'パスワード' (Password), and 'ドメイン' (Domain).
- ステップ 3 - 追加オプション (Step 3 - Additional Options):** Contains a checked checkbox labeled '機器コントローラの登録' (Register device controller).

The right panel provides instructions for each step:

- サーバー (Server):** '接続するOpenLAB サーバーのホスト名を入力し、[接続] ボタンをクリックしてください。' (Enter the host name of the OpenLAB server to connect to and click the [Connect] button.)
- 認証 (Authentication):** '指定したサーバーの資格情報を入力してください。' (Enter the credentials for the specified server.)
- 追加オプション (Additional Options):** '追加オプションを選択し、[登録] ボタンをクリックしてください。' (Select additional options and click the [Register] button.)

At the bottom right, there are 'キャンセル' (Cancel) and '登録' (Register) buttons.

- 3 接続をクリックして、ユーザー資格情報の入力ボックスを有効にします。
- 4 ステップ 2- 認証で、ユーザー認証情報を入力します。
- 5 機器コントローラの登録チェックボックスがオンになっていることを確認します。
- 6 登録をクリックします。
登録結果ダイアログが表示されます。
- 7 PC を再起動します。

3

インストール後のタスク

ソフトウェアインストール後のソフトウェアベリフィケーション 33

ウィルス対策プログラムの設定 34

集中管理された出力先の準備 37

出力先フォルダーのトラブルシューティング 38

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備 39

ドメインユーザーアカウントを設定 39

ネットワークプリンターの自動印刷を有効 42

ソフトウェアインストール後の ソフトウェアベリフィケーション

ソフトウェアベリフィケーションツール（SVT）では、使用するシステムが正しく構築およびインストールされ、設計仕様通りになっていることを示す文書が提供されます。インストールの終了時にソフトウェアベリフィケーションが正常に実行されている場合、再度実行する必要はありません。

- 1 Windows オペレーティングシステムを使用して、**スタート > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies > Software Verification Tool** を選択します。
- 2 検証するコンポーネントを選択します。
- 3 評価を実行を選択します。
アプリケーションが実行され、ソフトウェアベリフィケーションレポートが作成されます。
ドライブ:\SVReports にレポートが自動的に保存されます。
- 4 レポートに不合格と表示されている場合、コンピューターの要件を確認し、データシステムを再インストールしてください。
ソフトウェアベリフィケーションレポートの結果が「合格」となるまで、システムを使用しないでください。

ウイルス対策プログラムの設定

- 1 「ファイアウォールの設定」に記載されたファイアウォールポートを必ず開いてください。『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v2.8_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』を参照してください。
- 2 以下のフォルダーをウイルス対策スキャンから除外する必要があります。これらのフォルダーをスキャンする場合は、システムが測定中やデータ解析中でないときに実行してください。スキャンによって動作が遅くなったり、ウイルス対策プログラムと CDS アプリケーションが同じファイルへ同時アクセスすることで分析が中断されたりすることがあるためです。
 - ・ セットアップ時に設定したストレージロケーション（新規インストールのデフォルト：C:\SSStorage; アップグレードしたシステムのデフォルト：C:\DsData）
 - ・ ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies
 - ・ ドライブ:\ProgramData\Agilent
 - ・ ドライブ:\ProgramData\Agilent IPB Files
 - ・ ドライブ:\ProgramData\Agilent Technologies, Inc
 - ・ ドライブ:\ProgramData\ChromatographySystem
 - ・ ドライブ:\ProgramData\firebird
 - ・ ドライブ:\ProgramData\IsolatedStorage除外するフォルダーの設定方法は、使用しているウイルス対策ソフトウェアのマニュアルを参照してください。

注記

ネットワーク不正侵入防止機能付きのウイルス対策ソフトウェアの場合、一般的なシステムパフォーマンスが多少低下することを想定してください。ネットワーク不正侵入防止機能を無効にするには、使用しているウイルス対策ソフトウェアの説明を参照してください。

- 3 次のファイルをウイルス対策スキャンから除外する必要があります。
 - ・ ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Acquisition\AcquisitionServer.exe

オプション設定の手順

Agilent では、パフォーマンス向上のため、一定のアプリケーションをホワイトリストに登録することをお勧めしています。これらの設定は特に、OpenLab CDS の実行時、ウィルス対策ソフトウェアにより大量の CPU リソースが消費される場合に検討してください。以下は、Trend Micro™ 使用時に推奨される設定です。その他のウィルス対策プログラムでも同じレベルの設定が必要な場合があります。各プログラムの説明書を参照してください。

- 1 使用している Trend Micro のバージョンに **Web レピュテーション**がある場合：パフォーマンス向上のためには、オフにします。

Web レピュテーションをオフにすると、ブラウジングを通したマシンの Web トラフィックがチェックされないというリスクがあります。

ゲートウェイレベル上に別の URL/Web スキャナを設定してエンドポイントを保護するか、エンドポイントからインターネットへのアクセスを制限してください。大部分の感染はインターネット Web サイトに由来するため、これらのマシンからアクセスすべきではありません。

- 2 リアルタイムスキャン：除外対象を追加し、スキャンを作成、変更、または取得されるファイルから作成または変更されるファイルへ変更します。

除外すると Agilent Technologies の作業ディレクトリはスキャンされないため、パフォーマンスが向上します。

このマシン上で作成または変更されたファイルしかスキャンされないリスクがあります。アクセスしただけのファイルは省略されます。作成時またはマシンへの書き込み時に、気付かずに感染してしまった潜伏ファイルはスキャンされません。

スキャンスケジュールを毎日に増やし、マシン上のすべてのファイルについて感染や潜伏を確認してください。

- 3 動作の監視：Agilent では、一定のフォルダーを**承認済みプログラム**に含めることをお勧めしています。下記リストを初期設定の参考にしてください。

注記

除外したファイルが感染しても検出されません。検出されないリスクを回避する措置を講じてください。たとえば、これらのファイルをカバーするには、毎日スキャンが実行されるようにします。

- Program Files (x86)\Agilent Technologies\Certificate Service\
- Program Files (x86)\Agilent Technologies\Data Collection Agent\
- Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab\Services\
- Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Services\

インストール後のタスク

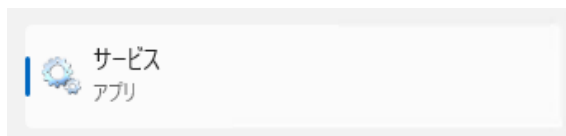
ウィルス対策プログラムの設定

- Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Acquisition\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Restore Utility\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Data Analysis\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Platform\
Data Repository\Data Repository\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Platform\
Reverse Proxy\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenSearch\
 - Program Files (x86)\Agilent Technologies\Test Services\
- 4 リアルタイムモニタリング：以下のフォルダーをリアルタイムモニタリング
設定の除外リストに追加します。
- ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\

集中管理された出力先の準備

OpenLab CDS では、データ解析を開かずに、測定時にデータを自動的に解析することができます。測定時の解析中に、注入レポートの印刷が必要になる場合があります。集中管理された出力先では、これらのレポートが共有出力先フォルダーにコピーされます。次に、FolderMill などのサードパーティ製のプログラムが共有フォルダーにアクセスし、フォルダー内のファイルをプリンターへ送信します。

- 1 Windows のスタートメニューからサービスを検索します。サービスアプリケーションを開きます。



- 2 Agilent OpenLab CopyTo Server を右クリックし、プロパティを選択します。
- 3 ログオンタブをクリックし、アカウントを選択してドメインユーザーのログイン資格情報を入力します。ユーザーがローカル管理者グループのメンバーで、出力先フォルダーへ書き込む権限を持っている必要があります。
- 4 設定を確認して、サービスを再起動します。
- 5 OpenLab のコントロールパネルから管理 > 出力先フォルダーで共有した出力先フォルダーを設定します。
 - a 出力先フォルダーの追加をクリックします。
 - b 名前、フォルダーパス（UNC 形式）、説明（オプション）を入力し、保存をクリックします。
- 6 オプション：キューのサイズを設定します。

出力先フォルダーごとにキューのサイズが異なります。各々のキューのサイズは、コンフィグレーションファイル
ドライブ:\ProgramData\Agilent\CopyToServer\CacheSizeLimit.ini で定義します。パラメータ CacheSizeLimit でキューのサイズを変更することが可能です。

インストール後のタスク

集中管理された出力先の準備

デフォルト値は 500 MB で、各キュー（出力先フォルダー）のサイズはデフォルトでは 500 MB に制限されます。キャッシュの最大サイズに達するまで、ファイルがキューに入ります。最大サイズに達すると、キューはリクエストの受け入れを停止します。キューはクリアされた後、自動的に再起動してリクエストの受け入れを開始します。

出力先フォルダーのトラブルシューティング

問題	解決策
Agilent OpenLab CopyTo Client または Agilent OpenLab CopyTo Server サービスがクラッシュした	サービスは自動的に再起動します。
ワークステーションと出力先フォルダー間のネットワークの問題	出力要求がワークステーション上でバッファされます。ネットワークが回復すると、ファイルは出力先フォルダーへ自動的にコピーされます。
出力先フォルダーのキャッシュがいっぱいになっている	出力先フォルダーのアクセスを確認してください。キャッシュサイズを増やすことを検討してください（ 集中管理された出力先の準備 37 ページを参照）。
権限が不十分のため出力先フォルダーにアクセスできない	Agilent OpenLab CopyTo Server サービスにログインしたドメインユーザーがローカル管理者で、出力先フォルダーに書き込む権限を持っていることを確認してください。
レポートが出力先フォルダーでスタックしている	プリント用の出力先フォルダーへのアクセスに使用されているサードパーティ製のソフトウェアが正しく機能していることを確認してください。プリンターエラーが発生していないことを確認してください。

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

以下を行う場合は、次の手順を実行してください。

- ・ 自動解析中にレポートを作成し、ファイルとして保存する。ネットワーク共有へのレポートのエクスポートは、レポートを外部システム（LIMS など）へ送信する一般的な方法です。
- ・ 自動解析中に生データや結果をエクスポートし、ネットワーク共有にファイルを保存する。

この方法は、ネットワーク共有にアクセスしてサービスとしてログインするための特定のドメインユーザー権限が必要です。

ドメインユーザーアカウントを設定

- 1 ローカル管理権限を持つ Windows ドメインユーザーとしてログインします。
- 2 Windows のスタートメニューからサービスを検索します。サービスアプリケーションを開きます。

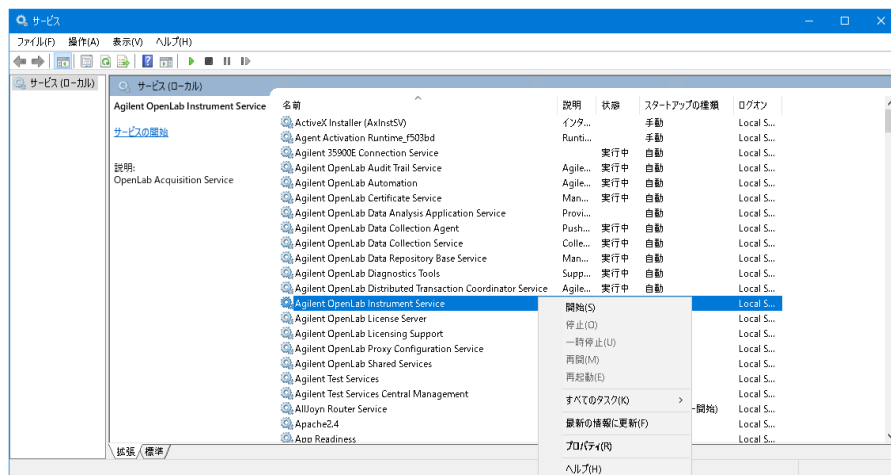


- 3 Agilent OpenLab Instrument Serviceのステータスが**開始**または**実行中**になっていることを確認します。停止している場合は、右クリックし**開始**を選択します。

インストール後のタスク

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

- 4 Agilent OpenLab Instrument Service を右クリックし、プロパティを選択します。



インストール後のタスク

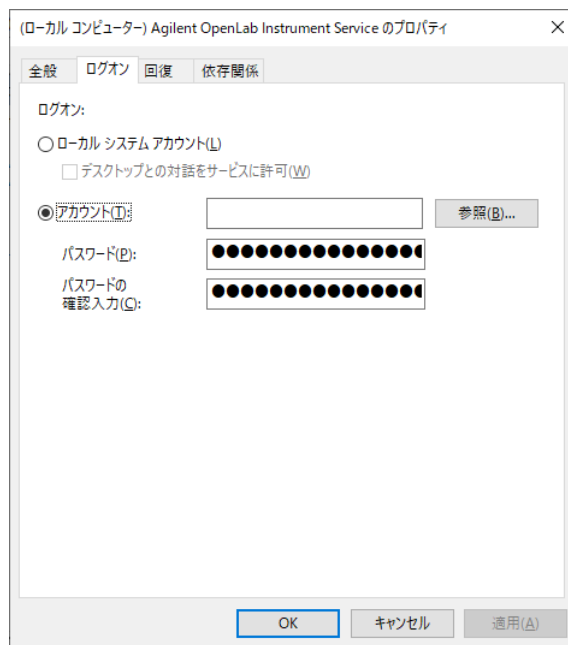
自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

- 5 ログオンタブでアカウントを選択し、ネットワーク印刷権限を持つドメインユーザーのログイン資格情報を入力します。

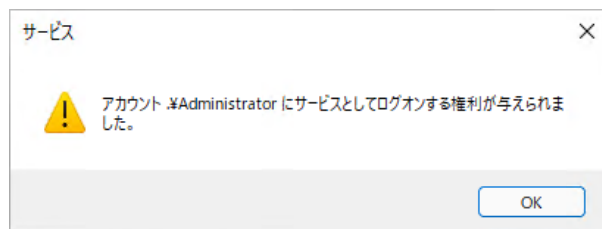
注記

ユーザーがローカル管理者グループのメンバーである必要があります。

OK をクリックします。



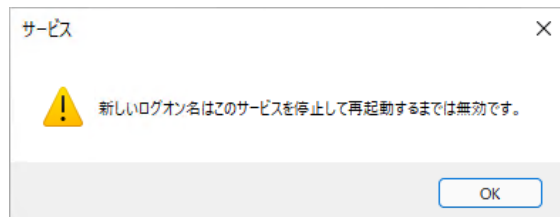
- 6 サービスウィンドウで、アカウントにサービスとしてログオン権限が正しく付与されたことが確認されます。OK をクリックします。



インストール後のタスク

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

- 7 サービスウィンドウで OK をクリックして、サービスを終了して再起動するまで新しいログオン名は有効にならないことを確認します。



- 8 PC を再起動します。これにより、Instrument Service で指定したログオンユーザーが、データ測定でファイルを自動的にネットワーク共有へエクスポートできるようになります。

ネットワークプリンターの自動印刷を有効

出力先フォルダーを使用せず、自動解析中にネットワークプリンターに印刷する必要がある場合は、この手順に従ってください。

準備

- ・ ドメインユーザーアカウントが設定済みである（[ドメインユーザーアカウントを設定](#) 39 ページ を参照）。
- 1 Agilent OpenLab Instrument Service のプロパティウィンドウのログオンタブで指定したドメインユーザーアカウントを使用してログインします。
 - 2 Windows の設定で、デバイス > プリンターとスキャナーを開き、プリンターまたはスキャナーを追加しますをクリックします。
 - 3 リストから必要なプリンターを選択します。リストにない場合、プリンターが一覧にない場合をクリックし、追加する共有プリンター名を参照または入力します。プリンターが追加されたら、テストページを印刷します。
 - 4 Windows のプリンター設定で、共有プリンターをローカルの通常使うプリンターに設定します。



4 オプションの手順

OpenLab Help and Learning のみインストール 44

オフラインマシンのパフォーマンス向上 45

NIST ライブラリ検索の設定 46

セキュリティ保護されたストレージパスの変更 47

OpenLab Help and Learning のみインストール

OpenLab CDS をインストールせずに OpenLab Help and Learning コンテンツをマシンにインストールするには、このオプションを使用します。

OpenLab CDS がインストールされているか、インストールする予定のマシン上ではこのオプションを使用しないでください。

- 1 USB メディアを挿入し、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。
- 2 スタート画面で **OpenLab CDS** を選択し、**OK** をクリックします。
- 3 OpenLab CDS インストーラの**インストール**をクリックします。
- 4 **OpenLab Help & Learning のみ**をクリックします。
- 5 言語を選択し、**Next** をクリックします。
- 6 **License agreement** ページの使用許諾条件に同意し、**Next** をクリックします。
- 7 インストールディレクトリを確認します。異なるディレクトリを指定する場合は **Change...** をクリックします。
- 8 **Install** をクリックします。
- 9 インストールが完了したら **Finish** をクリックします。

インストーラの同じリンクから OpenLab Help and Learning をアンインストールまたは修復できます（[OpenLab Help and Learning のみアンインストール](#) 121 ページ を参照）。

オフラインマシンのパフォーマンス向上

OpenLab CDS を実行するコンピューターは、インターネットに接続されていないとパフォーマンスが低下する場合があります。

Windows オペレーティングシステムには、セキュアソフトウェアの使用時に Windows セキュリティ証明書をすべて更新するために、常にオンライン接続を検索するルーチンが組み込まれています。

この問題を解決するには、すべてのワークステーション上で以下のシステム設定を使用してください。

- 1 Windows の設定で、インターネット オプションを検索します。
インターネットのプロパティダイアログが表示されます。詳細設定タブで、以下のチェックボックスをオフにします。
 - セキュリティ > 発行元証明書の取り消しを確認する
 - セキュリティ > サーバーの証明書失効を確認する
- 2 以下のレジストリキーを変更または追加します。
 - [HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Policies¥Microsoft¥SystemCertificates¥AuthRoot]
"DisableRootAutoUpdate"=dword:00000001
 - [HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Policies¥Microsoft¥SystemCertificates¥AuthRoot]
"DisableRootAutoUpdate"=dword:00000001
- 3 ルート証明書をオフにしたことを記録します。これにより OpenLab CDS インストーラが失敗します。インストールが失敗しないようにするにはルート証明書をオンにする必要があります。

NIST ライブラリ検索の設定

OpenLab CDS 内で MS ライブラリ検索を使用するには、ライブラリ検索を実行するワークステーション（または、クライアント/サーバー設定、クライアントまたは AIC）に NIST MS Search プログラムがローカルでインストールされている必要があります。

スタンドアロン、クライアント/サーバー、または Citrix/ターミナルサーバー設定内での NIST ライブラリフレームワークのインストールおよびコンフィグレーションの詳細については、『[Setup and Configuration of MS Library Search \(CDS_Configure_MS_Libraries.pdf\)](#)』を参照してください。このドキュメントでは、他の市販のライブラリやユーザー作成のライブラリと OpenLab CDS MS ライブラリ検索との併用および管理についても説明しています。

セキュリティ保護されたストレージパスの変更

転送用のファイルをバッファースするために、OpenLab CDS はデフォルトのロケーション `%ProgramData%\Agilent\SecureFileSystem` にフォルダーを作成します。

デフォルトのロケーションが不適切な場合、フォルダーパスを変更できます。セキュリティ保護されたファイルストレージのロケーション変更の詳細については、Agilent のサポート担当にお問い合わせください。

OpenLab CDS ライセンスについて 49

ライセンスファイル 49

ライセンスタイプ 49

ライセンスの取得 51

SubscribeNet でライセンスの作成、ダウンロードおよびインストール 51

その他のライセンス入手方法 54

ライセンスのインストール 56

OpenLab CDS ライセンスについて

システムのスタートアップライセンスでは、インストール後 60 日間 OpenLab CDS を実行できます。60 日の期間以降にデータシステムソフトウェアを実行するためには、ライセンスファイルをインストールする必要があります。

ライセンスを維持管理する最も効率的な方法は、インターネット経由で <http://agilent.subscribenet.com/> を使用することです。

ライセンスファイル

ライセンスファイルには、お客様のソフトウェアライセンスが含まれています。ライセンスファイルには、製品、機器、およびアドオンライセンス（またはライセンス認証キー）が含まれます。ライセンスファイル情報には、お使いのシステムで同時に使用可能な機器およびその他のオプションの数が定義されます。

ライセンスファイルは、OpenLab CDS Workstation にインストールされます。ライセンスファイルは対象のコンピューターに制約されており、別のワークステーションへの移動は、SubscribeNet でライセンスの再作成が必要です。

ライセンスタイプ

ライセンスファイル内のライセンスまたはアクティベーションキーは、共有またはカウントのいずれかになります。

共有ライセンス システムコンピューターおよびその他のコンポーネントでは、共有、またはアドオンライセンスを使用できます。これは、コアライセンスを共有しているためです。

カウントライセンス このライセンスは、OpenLab CDS のフローティングライセンス方法の一部であり、どのコンポーネントにも恒久的に割り当てられるものではありません。AIC および機器などのコンポーネントが起動している間、これらに自動的に割

り当てられます。このライセンスは、コンポーネントを切断したときに自動的に返却されます。ライセンス管理プログラムでは、ライセンスの発行や取得を管理します。

この場合は、コンポーネント実行中のみライセンスが使用されます。インストールする各コンポーネントにではなく、同時に実行するすべてのコンポーネントに十分な数だけのライセンスを購入すればよいことになります。

ライセンスの取得

注記

ライセンスの取得には、ライセンスサーバーの MAC アドレスを入力する必要があります。ワークステーションの場合は、ローカルコンピューターの MAC アドレスです。クライアント/サーバーシステムの場合は、サーバーの MAC アドレスになります。

SubscribeNet でライセンスの作成、ダウンロードおよびインストール

インターネットにアクセスできない場合は、[その他のライセンス入手方法 54 ページ](#) のセクションを参照してください。

SubscribeNet にまだ登録していないユーザーの場合は、新規ユーザーセクションから行ってください。

SubscribeNet に登録済みの場合は、SubscribeNet で登録済みのユーザーセクションを参照してください。

準備 事前に用意するもの：

- Software Entitlement Certificate が入った薄紫色の封筒で提供される認証コードラベル。薄紫色の封筒を受け取っていない場合、販売店または弊社のサポート窓口にお問い合わせください。
- Software Entitlement Certificate に記載されている SubscribeNet の URL。
- コントロールパネルがインストールされているコンピューターの MAC アドレス、およびホスト名。

OpenLab CDS がインストール済みのコンピューターから MAC アドレスを取得するには、コントロールパネルを開き、**管理 > ライセンス** セクションを参照してください。**MAC アドレスのコピー**または**MAC アドレスの保存**から、ライセンス作成のための MAC アドレスを入手します。

注記

ライセンスをインストールした後にコンピューター名または参照ドメインが変更された場合、ライセンスを削除し、SubscribeNet で新しいライセンスを作成してダウンロード、インストールしてください。

注記

ライセンス作成時に使用した MAC アドレスを持つネットワークアダプタがマシンから外されると、お使いのライセンスは有効ではなくなります。新しいライセンスは、ライセンスサーバー上で現在利用可能な MAC アドレスを使用して作成する必要があります。

新規ユーザー

- 1 <https://agilent.subscribe.net/control/agil/AgilRegisterToAccount> にアクセスして、SubscribeNet で製品を登録してください。
- 2 登録ページでは、Authorization Code と プロファイル情報を入力します（必須入力のフィールドには * の印が付いています）。
ここで入力する電子メールアドレスが、ログイン ID になります。
- 3 **Submit** をクリックします。アカウント名が作成されると、それが表示されます。
SubscribeNet からお客様に、ログイン ID とパスワードが記載された、ようこそ電子メールが送信されます。
- 4 ログイン ID とパスワードで SubscribeNet にログインします。
ログインすると、オンラインのユーザーマニュアルリンクを使用して、質問などに対するヘルプにアクセスすることができます。
- 5 左側のナビゲーションバーから、**Generate or View licenses** を選択します。
- 6 新規にライセンスを作成するメッセージが表示されたらそれに従います。コンピュータの HOST NAME (ホスト名) を入力するよう要求されます。
サーバーホスト名を入力します。入力するホスト名には、DNS サフィックス (domain.com) を含めないでください。
- 7 ライセンス作成で詳細が表示され、**Download License File** をクリックします。お使いのコンピュータおよびバックアップロケーション（ポータブル記憶装置など）にライセンスファイルを保存します。
ライセンスファイルの再作成や、新規承認コードの追加、またはシステムへのライセンス追加作成のために、Agilent SubscribeNet サイトを再び訪れる際に、ログイン ID とパスワードを使用します。

SubscribeNet で登録済みのユーザー

- 1 SubscribeNet アカウントがすでにある場合は、
<https://agilent.subscribenet.com/> を使用します。

SubscribeNet パスワードが不明な場合
<https://agilent.subscribenet.com/control/agil/password> から再発行手続きを行ってください。
- 2 複数のアカウントがある場合は、Authorization Code（認証コード）に関連している SubscribeNet アカウントを選択します。
- 3 SubscribeNet のナビゲーションウィンドウから、**Register Authorization Code** を選択します。

このようにして、新しい Authorization Code を入力し、新しいライセンスを使用できるようにします。
- 4 左側のナビゲーションバーから、**Generate or View licenses** を選択します。
- 5 新規にライセンスを作成するメッセージが表示されたらそれに従います。コンピューターの HOST NAME (ホスト名) を入力するよう要求されます。

サーバーホスト名を入力します。入力するホスト名には、DNS サフィックス (domain.com) を含めないでください。
- 6 ライセンス作成で詳細が表示され、**Download License File** をクリックします。お使いのコンピューターおよびバックアップロケーション（ポータブル記憶装置など）にライセンスファイルを保存します。

ライセンスファイルの再作成や、新規承認コードの追加、またはシステムへのライセンス追加作成のために、Agilent SubscribeNet サイトを再び訪れる際に、ログイン ID とパスワードを使用します。

ソフトウェアアップデートの確認

SubscribeNet に認証コードを登録したら、製品に対してリリースされたソフトウェアアップデートがないか確認してください。アップデートが利用できる場合、ReadMe ファイルを開いて指示に従ってください。

その他のライセンス入手方法

ライセンスを作成できない場合、お近くの Agilent サポートオフィスにお問い合わせください。担当者が OpenLab ライセンス申請書を送信する方法をお伝えします。

オフラインライセンス

お客様のラボでインターネット接続が利用できない場合：

お客様自身またはローカルオンサイトサービスエンジニアが必要な情報を収集し、Agilent がお客様に代わってライセンスアカウントを作成します。電話でのサポートについては、販売・サービスの電話番号までお問い合わせください。連絡先情報については、「付録」を参照してください。

Agilent ライセンスサポートに必要な顧客情報：

お客様の代理でライセンスアカウントを作成する場合は、次の情報を Agilent に提出する必要があります。

1 アカウント情報：

アカウント名は、カンマで区切った会社名と実験室名になります。ここで提供される社員情報は、必要に応じて、システムへの今後のアクセスのために、お客様のアカウントの最初の管理者を指定するために使用されます。迅速なサービスをご提供できるよう、Agilent 販売・サービスセンターにご連絡いただく前に、次の情報を用意してください。

- ・ 会社名
- ・ 実験室/部門名
- ・ 名
- ・ 姓
- ・ 電子メールアドレス
- ・ 役職名
- ・ 電話番号
- ・ 国名、都道府県名を含めた住所

2 Authorization Code:

ライセンス

ライセンスの取得

Authorization Code は、薄紫色の封筒に入っているラベルに記載された英数字のコードです。複数のコードを受け取られた場合は、ご注文いただいたライセンスをすべてお客様のアカウントに付与できるよう、すべてのコードをご提示ください。

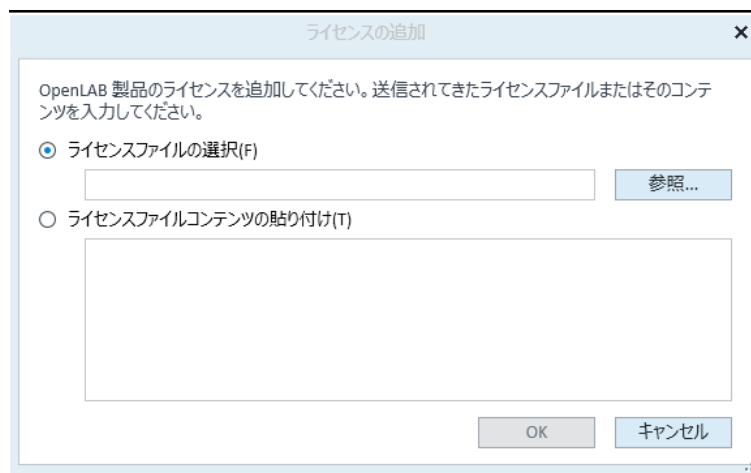
3 ライセンスの取得：

上記の情報をご提供いただいた後、Agilent はお客様の代理で SubscriberNet 経由でライセンスを生成します。ライセンスファイルは、発送先アドレスに送付されるか（CD で）、または FSE が直接お届けします（通常は USB メディアを使用）。ライセンスを受け取ったら、「ライセンスのインストール」のセクションに従ってシステムにライセンスをインストールしてください。

ライセンスのインストール

ライセンスはコントロールパネルを使用してシステムに追加する必要があります。

- 1 デスクトップのコントロールパネルショートカットをダブルクリックするか、スタートメニュー > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies > コントロールパネルの順に選択します。
- 2 管理 > ライセンスの順に選択します。
- 3 リボン内のライセンスの追加 **+** をクリックします。



- 4 次のようにライセンスのインストールを選択します。
 - ライセンスファイルの選択で、SubscribeNet のライセンス作成プロセスで保存したライセンスファイル (.lic) を参照して開きます。
 - ライセンスファイルコンテンツの貼り付けを選択し、受信したテキストファイルのライセンステキストを、所定のフィールドにコピーします。
- 5 OK をクリックします。

コントロールパネルの管理インターフェイスでは、インストールしたライセンスのステータスが表示されます。

注記

ライセンスを有効にするために、再起動してください。

6 OpenLab CDS Workstation Plus の コンフィグレーション

OpenLab Control Panel 59

認証の設定 60

セキュリティポリシーの設定 62

ユーザーおよびロールの設定 63

ユーザーの作成またはインポート 63

グループ 64

ロールと権限 65

ロールにユーザーまたはグループを追加 66

個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール 67

初期プロジェクトの設定 68

初期機器のコンフィグレーション 69

コントロールパネルのその他の設定 70

OpenLab Control Panel

すべてのコンフィグレーションタスクは OpenLab Control Panel で実行します。詳細については、「OpenLab Help & Learning」のコントロールパネルセクションを参照してください。

認証の設定

OpenLab CDS では、以下の認証プロバイダーをサポートしています。


- 内部

内部モードでは、ユーザーの資格情報が OpenLab CDS システムに保存されます。その他のユーザーをセットアップする前に、OpenLab CDS の管理者アカウントを作成するよう促されます。システムに新規ユーザーを作成できるのは内部モードのみです。その他のモードでは、別のシステムに存在するユーザーへのマッピングのみを行えます。

- Windows ドメイン

既存の Windows ユーザーを OpenLab CDS システムにインポートします。この認証は、Windows Active Directory ドメイン、または Enterprise 内の NT 4.0 ドメインで行われます。OpenLab CDS は、割り当てたユーザーの ID およびパスワードのみを使用します。OpenLab CDS のロールと権限はコントロールパネルで設定します。

インストールが終了すると、内部認証がデフォルトで設定されます。内部認証を使用する場合は何も行う必要はありません。以下の手順では、ドメイン認証を設定する方法について説明します。

- 1 コントロールパネルを起動します。ユーザー名 `admin` と、インストール時に指定したパスワードでログインします。
- 2 管理に移動します。
- 3 ナビゲーションウィンドウのシステムコンフィグレーションを選択します。
- 4 リボン内のシステム設定の編集  をクリックします。
- 5 認証プロバイダーのドロップダウンリストから **Windows ドメイン** を選択し、次へをクリックします。

注記

ストレージタイプは変更しないでください。

- 6 [ドメインユーザーを使用して...] チェックボックスをオンにし、ユーザーとグループの情報を取得する権限を持つユーザー資格情報を入力します。アカウントの選択をクリックしてユーザーの検索ダイアログを開き、管理者アカウントを選択します。
- 7 設定を確認します。完了すると、コントロールパネルが再起動します。

セキュリティポリシーの設定

特定の基準（21 CFR Part 11 など）に準拠する必要がある場合、必要に応じてセキュリティポリシーを調整してください。

認証プロバイダーが内部である場合、すべてのパラメータをコントロールパネルで設定できます。

外部の認証プロバイダー（Windows ドメイン）を使用すると、アプリケーションをロックするまでの時間の設定やシングルサインオンの有効化を設定できます。その他のパラメータはすべて外部システムによって定義されます。

- 1 コントロールパネルを起動し、**管理**へ移動します。
- 2 ナビゲーションウィンドウの **セキュリティポリシー** を選択します。
- 3 リボン内の **セキュリティポリシーの編集** をクリックします。
- 4 必要に応じてパラメータを設定し、変更を確認します。
コントロールパネルを再起動して変更を適用します。

注記

21 CFR Part 11 の要件を満たすには、**パスワード有効期間** を 180 日以下に設定してください。その他のデフォルト値は21 CFR Part 11 に準拠していますので、変更しないでください。

ユーザーおよびロールの設定

ユーザーが表示や実行できる内容を定義するために、OpenLab CDS では定義済みのロールを提供しており、ユーザーに特定のロールを定義することができます。

各ロールには、多くの特定の権限が定義されています。そのためカスタマイズロールを設定するときは、上位ロールから権限を削除するよりも、下位ロール（権限が少ない）に特定の必要な権限を追加することをお勧めします。

1 人のユーザーが複数グループのメンバーである場合もあります。各グループに対して 1 つ以上の特定のロールを割り当てる必要があります。1 人のユーザーに対してロールを割り当てることもできますが、簡素化のためロールの割り当てはグループレベルで行うことを推奨します。グループのすべてのメンバーには、そのグループのすべてのロールが自動的に割り当てられます。

- 1 コントロールパネルを起動し、**管理**へ移動します。
- 2 ナビゲーションウィンドウの **ユーザー**、**グループ**、または **ロール**を選択します。
- 3 新規項目を作成するか、既存の項目を編集します。

ユーザーの作成またはインポート

内部認証を使用する場合、コントロールパネルで必要なユーザーを作成します。外部認証システムとして Windows ドメインを使用する場合は、Windows ドメインユーザーをインポートします。

ユーザーの追加（内部認証のみ）

- 1 ナビゲーションウィンドウから**管理** > **ユーザー**をクリックします。
- 2 リボン内の**ユーザーの作成**をクリックします。
- 3 **ユーザーの作成**ダイアログで、関連するパラメータを入力します。

- ・ 新規ユーザーの名前とパスワードを入力します。
- ・ デフォルトでは、新規ユーザーは次回ログイン時にパスワードを変更する必要があります。パスワードを変更する必要がない場合は、**ユーザーは次回ログイン時にパスワードの変更が必要**チェックボックスをオフにします。
- ・ **ロールメンバシップ**タブで、ユーザーを適切なロールに割り当てます。デフォルトロールを使用するか、コントロールパネルの**管理 > ロール**で独自のロールを作成できます。

4 OK をクリックします。

ユーザーのインポート (Windows ドメイン認証のみ)

システムにユーザーを追加するには、ユーザーとグループ情報をドメインから取得する権限を持っている必要があります。

- 1 ナビゲーションウィンドウから**管理 > ユーザー**をクリックします。
- 2 リボン内の**ユーザーのインポート**をクリックします。
- 3 **ユーザーの検索**ダイアログボックスに、Windows ドメインユーザー名の検索文字列を入力します。
- 4 検索結果リストから、インポートするユーザーを選択し、**追加**をクリックします。選択したユーザーが**ユーザーの選択**リストに追加されます。
- 5 ステップ 2 から 4 を繰り返して、インポートするすべてのユーザー名を**ユーザーの選択**リストに追加し、**OK** をクリックします。

グループ

外部認証プロバイダーを利用する場合、外部システムの既存グループをインポートするか、新しく内部グループを作成することができます。マッピングおよび作成できるグループの数に制限はありません。

外部システムまたはコントロールパネルのグループにユーザーを割り当てます。OpenLab CDS にのみ関係のある追加のユーザー割り当てが必要な場合には、コントロールパネルに作成します。ユーザー割り当てが必要でない場合は、グループをインポートして、そのグループに必要なロールを割り当てるだけで十分です。

グループの削除または割り当てを解除する場合、そのグループのメンバーであるユーザーに対する変更は行われません。

ロールと権限

ロールは権限をユーザーまたはユーザーグループに割り当てるために使用され、全体的にまたは特定の機器やプロジェクト、プロジェクトグループまたはロケーションごとに割り当てることが可能です。システムには定義済みロールのリストが、システムインストールの一部としてインストールされています（たとえば、**機器管理者**、**機器ユーザー**、または**すべて**）。各ロールには、固有の権限が割り当てられています。

権限は、主要な3つのロールタイプ（プロジェクトロール、機器ロール、管理ロール）に従ってグループ化されています。権限をロールに割り当てる場合、まず必要なロールタイプを選択してからそのロールタイプに関連する権限を選択します。各ロールは、特定のロールタイプ1つに対応する権限のみを有します。例外として、定義済みロールの**すべて**だけは、すべてのロールタイプのすべての権限を有します。ユーザーまたはグループがシステム機能を実行するためには、複数のロールが必要な場合があります。例えば、化学者というロールを持つユーザーには、機器を実行する権限を持つ**機器ユーザー**といった別のロールが必要な場合があります。

コントロールパネル内にさまざまなロケーションから成るツリーを作成し、関連するロケーションに機器を追加することが可能です。それぞれの機器や機器グループに、異なった機器ロールを割り当てることができます（**個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール** 67 ページ も参照してください）。たとえば、ユーザーが1つの機器で**機器管理者**ロールを持ち、別の機器で**機器ユーザー**ロールを持っている場合があります。

コントロールパネルでさまざまなプロジェクトまたはプロジェクトグループから成るツリーを作成し、さまざまなプロジェクトにさまざまなプロジェクトロールを割り当てることもできます（**個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール** 67 ページ も参照してください）。たとえば、ユーザーがプロジェクトで**プロジェクト管理者**のロールを持つと、コントロールパネルで設定を管理することができます。もう1つのプロジェクトでは、このユーザーはプロジェクトの内容を編集することはできても、プロジェクトの設定を変更することはできないロールになっている場合があります。

権限の詳細については、「付録」を参照してください。

表 5: ロールタイプの説明

ロールタイプ	説明
管理者権限	これらの権限はユーザーまたはグループに対して全体的に割り当てられ、機器、ロケーションレベルで変更することはできません。代表的な管理権限に、バックアップとリストア、セキュリティの管理、プリンタの管理などがあります。
機器権限	これらの権限は、全体的に、または機器、ロケーションレベルで割り当てることが可能です。機器に関する権限には、 機器またはロケーションの表示 や 機器の実行 などがあります。コントロールパネルのロケーションと機器ツリーを閲覧するには、全体のレベルで 機器またはロケーションの表示 の権限が必要となります。
プロジェクト権限	さまざまなレベルのデータへのアクセスまたはその変更を行うための権限。これらの権限はグローバルに、またはプロジェクトあるいはプロジェクトグループレベルで割り当てることが可能です。

ロールにユーザーまたはグループを追加

- 1 ナビゲーションウィンドウから、**管理 > ロール**をクリックします。
- 2 ロールウィンドウで、ユーザーまたはグループに割り当てるロールを選択します。
- 3 リボン内の**ロールの編集**をクリックします。
- 4 **ロールの編集**ダイアログボックスで、**メンバータブ**をクリックします。
- 5 **ユーザーまたはグループの追加**をクリックします。
- 6 **ユーザーおよびグループの検索**ダイアログボックスで、ユーザーまたはグループ名を入力するか、**検索**をクリックして検索条件を満たすすべてのユーザーとグループのリストを表示します。
- 7 検索結果でユーザーまたはグループを選択し、**追加**をクリックします。
- 8 **OK**をクリックします。

個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール

デフォルトでは、ユーザーまたはグループのロールは、すべてのロケーション、機器、プロジェクトグループまたはプロジェクトで全般的に設定されます。ロールの設定はそれぞれ、ルートノードの**機器**または**プロジェクト**から継承されます。特定のプロジェクトでユーザーまたはグループに異なるロールを割り当てるには：

1. 該当するプロジェクトを選択します。
2. リボン内の**権限の編集**をクリックします。
3. **権限の編集**ダイアログで、**親からの権限の継承**チェックボックスをオフにします。

その後、特定のノードについてのみ有効となる異なるロールを割り当てる事が可能になります。

個々のロケーションまたは機器で**機器**のロールを割り当てるができます。

プロジェクトを使用すると、**プロジェクト**ロールを個々のプロジェクトグループまたはプロジェクトに割り当てるができます。

管理ロールは、常に全般で設定されます。

初期プロジェクトの設定

- 1 コントロールパネルを起動し、プロジェクトへ移動します。
- 2 リボン内の**作成**をクリックして、新しいプロジェクトを作成します。

CDS 設定タブで、

- メソッド、シーケンス、結果、シーケンステンプレートおよびレポートテンプレートのロケーションを入力します。
- そのプロジェクトに対して必要な監査証跡設定を行います。

詳細については、「OpenLab Help & Learning」の「コントロールパネル」セクションを参照してください。

初期機器のコンフィグレーション

- 1 コントロールパネルを起動し、機器へ移動します。
- 2 リボンから作成をクリックし、新しい機器を作成します。
- 3 機器を選択し、リボンから機器のコンフィグレーションをクリックします。
- 4 自動コンフィグレーション（利用可能な場合）を使用して機器をコンフィグレーションすることを推奨します。自動コンフィグレーションをクリックして、機器の IP アドレスまたはホスト名を入力します。

詳細については、「OpenLab Help & Learning」の「コントロールパネル」セクションを参照してください。

コントロールパネルのその他の設定

コントロールパネルのその他の設定として次のことが行えます。

- 機器ステータスのレポート頻度の変更
- プロジェクトの監査証跡設定の変更
- プロジェクトの署名レベルの編集

詳細については、「OpenLab Help & Learning」の「コントロールパネル」セクションを参照してください。

7 OpenLab CDS ソフトウェアについて

ソフトウェアアーキテクチャ 72

Workstation Plus 上のコンポーネント 73

インストールされるコンポーネント 74

21 CFR Part 11 のコンプライアンス 76

データセキュリティ 76

データの整合性 76

監査証跡 77

カスタマイズ 78

カスタム計算によるカスタマイズ 78

レポートテンプレートによるカスタマイズ 78

外部プログラムを起動するようアプリケーションをカスタマイズ 79

生データと結果のエクスポート 79

ソフトウェアアーキテクチャ

OpenLab CDS は、分析ワークフロー用のデータシステムソリューションです。業界をリードする GC および GC/MS（シングル四重極）に加え、クラス最高の LC および LC/MS（シングル四重極）を含めたさまざまな機器を制御することができます。集中型システム管理によってクロマトグラフィとシングル四重極質量分析を拡張可能なひとつのソリューションに統合します。これにより、ラボのワークフローを合理化して、生産性を最大限に高めることができます。ユーザーインターフェイスはニーズに合わせ簡略化されています。最先端の使用感を備えたユーザーインターフェイスとラーニングツールによって、速度と生産性を速やかに向上させることができます。

Agilent OpenLab CDS ソフトウェアは読み取り専用の USB メディアで提供されます。この USB メディアには、実行可能なファイルとドキュメントがすべて含まれます。次のものが含まれます。

- 測定
- データ解析 および レポート
- Shared Services
- Secure Storage
- カスタム計算エディター
- ユーザーマニュアルを含む Help & Learning プラットフォーム
- Agilent LC、GC、LC/MS、GC/MS、A/D 用の機器ドライバーソフトウェア
- Virtual Instruments の機器ドライバーソフトウェア (Data Player)
- Agilent Parts Finder
- サードパーティ製ツール

Workstation with Secure Storage では、すべてのコンポーネントが 1 台の PC にインストールされます。結果は、コンテンツ管理コンポーネントによりインストールされるデータベースに保存されます。ユーザーは、ローカルファイルシステムを介してデータにアクセスできません。システムは、最大 4 台の機器接続をサポートします。



図 2: Workstation Plus と機器

Workstation Plus 上のコンポーネント

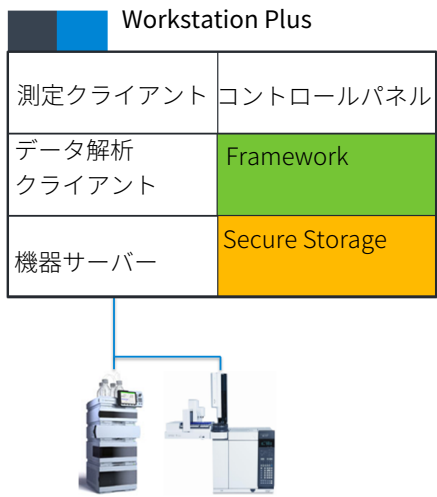


図 3: Workstation Plus 上のコンポーネント

測定クライアント	コンフィグレーションされた機器で生データを取り込みます。
データ解析クライアント	取り込んだデータを解析します。
機器サーバー	コンフィグレーションされたすべての機器への接続を制御します。

コントロールパネル	Shared Services コントロール機能にアクセスするためのユーザーインターフェイスです。
Framework	再利用可能な OpenLab CDS サービス、コンポーネント、およびツールです。
Secure Storage	コンテンツ管理コンポーネントで、データベースおよび Content Browser を提供しています。

インストールされるコンポーネント

以下の Agilent のコンポーネントは、OpenLab CDS システムと一緒にインストールされます。インストールされるコンポーネントは、インストールのタイプ（ワークステーション、クライアント、AIC、またはサーバー）によって異なります。

- OpenLab Backup Utility と OpenLab Restore Utility
OpenLab システムのバックアップおよびリストア操作のツールセット。
- OpenLab CDS
コアアプリケーション。
- OpenLab CDS 機器ドライバー
Agilent 35800 A/D、Data Player、GC、GC/MS、LC、LC/MS、および Ss420x ドライバー。
- OpenLab CDS eMethod ツール
eMethods をインポートできます。
- OpenLab Certificate Service と OpenLab Certificate Service Tool
民間の証明書が利用できない場合に、ネットワークトラフィックを保護するためのソリューション。ワークステーションでは使用しません。
- OpenLab CopyTo Server および OpenLab CopyTo Client
出力先フォルダーを管理します。
- OpenLab Data Collection Service と OpenLab Data Collection Agent
分散システムでシステムおよびトポロジー関連の情報を収集します。
- OpenLab Data Repository
システムアクティビティログおよびその他のソフトウェアコンポーネントにより、診断およびトポロジー関連の情報を保存するために使用されるストレージインフラストラクチャ。

- OpenLab Reverse Proxy
OpenLab コンポーネントへセキュリティで保護された通信を提供します。
- Openlab SDMS と Secure Storage
コンテンツ管理に関連した複数のコンポーネント。
- OpenLab Storage Client Services
- OpenLab Shared Services
システムコンフィグレーション、セキュリティ、アプリケーション設定、ライセンス、および通知機能を提供するサービスおよびツールのセット。
- Software Verification Tool
使用するシステムが正しく構築およびインストールされ、設計仕様通りになっていることを示す文書が提供されます。
- Test Services
以前は QualA でした。データリポジトリと通信します。

21 CFR Part 11 のコンプライアンス

電子記録とコンピュータ制御システムに関する FDA の規定およびガイドラインを満たすには、安全なデータ処理の基本について理解することが重要です。

- データセキュリティ:システムへのアクセスを制限し、無許可アクセスを防止することで、データを物理的に保護します。
- データ整合性:生データおよびメタデータを保護して無許可修正を防止し、生データと結果をリンクさせて元の結果をいつでも再生します（規制下の場合、新しい結果のコピーをそれぞれ書面化する場合など）。
- 監査証跡:結果に対して誰がいつ何を行ったかを文書化し、元の生データに新しい再解析バージョンを追加したユーザーを追跡します。

データセキュリティ

セキュリティ関連の Shared Services 機能には以下が含まれます（詳しくは [コントロールパネル](#) 81 ページ を参照してください）。

- システムアクティビティログ
- 認証プロバイダーの選択
- ユーザー、グループ、ロール、および権限の管理
- セキュリティポリシー

データの整合性

OpenLab CDS は、21 CFR Part 11 に準拠する方法でデータを保存します。これにより、アクセスコントロールおよび監査証跡機能のある安全なデータ保存を提供します。データファイルは、データの整合性とトレーサビリティを確保するためにバージョン化されています。また、OpenLab CDS では電子署名を利用してデータにサインオフすることが可能です。

監査証跡

監査証跡には次のタイプがあります。

- シーケンスの監査証跡は、データの測定時にシーケンスに対して行われた変更の記録です。
- メソッドの監査証跡は、サンプルプレップメソッド、測定メソッド、または解析メソッドに加えられた変更の詳細リストを提供します。
- 注入データの監査証跡は、分析中およびデータ解析のすべての変更を一覧表示したシングル注入の記録です。
- 結果セットの監査証跡は、シーケンス/結果セットに含まれるすべての注入データの監査証跡のスーパーセット（上位集合）です。

監査証跡の具体的な動作は、コントロールパネルでのプロジェクト設定によって変わります。

カスタマイズ

OpenLab CDS は、さまざまなワークフローやアプリケーションをサポートするようにカスタマイズできます。カスタマイズ機能はさまざまな方法で利用できます。

ツールの使用方法の詳細については、「OpenLab Help & Learning」を参照してください。

カスタム計算によるカスタマイズ

データ解析は、追加の値を計算することで機能を強化することができます。Custom Calculation Editor で計算され、解析メソッドから参照されるか、解析メソッドに埋め込まれます。

これらの計算は非常に複雑になることがあります。計算結果はデータ解析に直接表示されるため、レポートを作成する必要はありません。

カスタム計算は、結果セット単位で処理されます。これらは結果セットのすべての注入データを解析する場合のみ計算されます。

レポートテンプレートによるカスタマイズ

レポートテンプレートで、メソッド固有のカスタム計算結果を呼び出したり、テンプレート固有の追加の計算式を定義したりできます。テンプレート固有の値は、レポートプレビューまたは最終レポートにのみ表示されます。

レポートは、注入データレベル、結果セットレベル、複数の結果セットに対して作成されます。レポートを使用して、上述のすべてのレベルの結果評価を自動で行うことができます。

アプリケーションでは石油化学製品や医薬品用の一般的なレポートテンプレートを提供しています。このテンプレートはデータ解析にインポートできます（「OpenLab Help & Learning」のデフォルトテンプレートのインポートを参照）。

外部プログラムを起動するようアプリケーションをカスタマイズ

カスタマイズ機能によって、OpenLab Data Analysis のデータ選択やデータ解析ビューにリボングループやアイコンを追加できます。

外部プログラムをアイコンから起動し、プロジェクトデータパスや現在の注入データのパスをパラメータとしてプログラムに引き渡すことが可能です。

カスタマイズは、ドライブ:\ProgramData\AgilentTechnologies\OpenLab DataAnalysis\ のファイル CustomToolsConfiguration.xml を基にユーザーが作成します。例として CustomToolsConfiguration.xml ファイルがメディアの Setup\Tools\Support\UCL\Customization フォルダーにあります。

詳細については、OpenLab Help & Learning を参照してください。

生データと結果のエクスポート

データ解析により、解析メソッドの一部としてポスト解析用プラグインを実行することができます。これらのポスト解析用プラグインでは、シングルランおよびシーケンスランの解析の一部として生データや結果をエクスポートすることが可能です。スクリプトは、以下の形式にエクスポートできます。

- OpenLab ChemStation エクスポート (.D/.ch 形式)
- AIA エクスポート (OpenLab CDS 2.x の生データとピーク結果を AIA Chromatography Data Standard Specification V1.0 で規定されている netCDF (Rev. 3.4) 形式)
- ASR エクスポート (OpenLab CDS 2.x の生データを ASR (Analytical Studio Reviewer) ファイル形式)
- OpenLab CDS 2.x データエクスポート (ACE 用の .dx ファイル)
- CSV エクスポート (OpenLab CDS 2.x の生データをカンマ区切り .csv ファイル形式)

Allotrope Data Format (ADF) プラグインなどのその他のプラグインは SubscribeNet 経由で入手できます。

8 システム設定およびメンテナンス

コントロールパネル 81

Shared Services メンテナンス 82

バックアップとリストアに関する重要な情報 83

バックアップのコンテンツ 84

必要な領域 84

コンフィグレーション 84

バックアップログ 85

障害復旧プランの作成 85

バックアップ手順 87

バックアップ中のウィルス対策スキャン 87

バックアップユーティリティの使用 88

PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート 94

PostgreSQL データベースのカスタムデータディレクトリの設定 96

リストア手順 97

リストアログ 97

既存の OpenLab システムのリストア 98

OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされていないクリーンなマシンのリストア 100

アクティビティログインデックスのマニュアル再構築 102

リストアバリデーション 103

ルーチンメンテナンス 105

トラブルシューティング 106

OpenLab CDS PC の動作が遅い 106

ソフトウェアの最初のインスタンスを開くのが遅い 106

コントロールパネル

コントロールパネルを使用すると、セキュリティポリシー、コンフィグレーションの一元管理、およびラボステータスの一覧表示などの Shared Services コントロール機能にアクセスできます。

機能にアクセスするには特定の権限が必要な場合があります。

コントロールパネル機能の詳細については、[OpenLab Help & Learning](#) を参照してください。

Shared Services メンテナンス

Shared Services メンテナンスプログラムは、OpenLab ソフトウェアと同時に自動的にインストールされ、管理者がシステムを管理するために使用します。

ユーティリティを開くには、**スタート > (すべてのアプリ >)**

Agilent Technologies > メンテナンスユーティリティを選択します。このユーティリティにアクセスするには Windows の管理者権限が必要です。

Windows ドメイン Windows ドメイン認証を使用して OpenLab ユーザーを識別する場合に、このユーティリティの**Windows ドメイン**タブが使用できます。

ユーザーの資格情報が保存されているサーバーに OpenLab CDS がアクセスできる必要があります。Windows ドメインサーバーにアクセスするために OpenLab CDS が使用する資格情報を、**Windows ドメイン**タブで指定または変更します。

クライアント/サーバーシステム：この機能でアクセスできるのは、**メンテナンスユーティリティ**プログラムを起動したコンピューターに保存された資格情報だけです。Windows ドメインサーバーへのアクセスに使用する Windows アカウントの**ドメイン**、**ユーザー名**、または**パスワード**を指定または変更するには、サーバー上にインストールされている**メンテナンスユーティリティ**プログラムを使用します。

サーバー設定 サーバー設定タブでは、異なるサーバー接続を管理できます。ワークステーションコンフィグレーションでは、通常はローカルマシンにのみ接続されています。

IaaS 設定 このタブの設定は、Workstation Plus には適用されません。

バックアップとリストアに関する重要な情報

OpenLab CDS Workstation Plus データベースをリストアするため前提条件は、OpenLab CDS Workstation Plus を定期的にバックアップすることです。Agilent では、このためにソフトウェアにより提供されるバックアップおよびリストアユーティリティを使用することをお勧めします。

バックアップユーティリティを使用して、即時バックアップまたは定期的なバックアップを実行します。バックアップユーティリティは、定期的なフルバックアップと、フルバックアップの間に実行する差分バックアップをサポートしています。

致命的なシステム障害が発生した場合、バックアップはデータ損失量を軽減します。バックアップを実施することで、バックアップ時点でコミットされたデータをリストアすることができるよう保証されます。アップロード待ちでまだコミットされていないデータや、バックアップを実施した後にシステムに追加または更新されたデータは、バックアップをリストアしても復旧できません。

バックアップが正しく実施され、リストアできることを確認するには、リストア手順をテストする必要があります。有効なリストアを実行するには、障害復旧プランを作成する必要があります。[障害復旧プランの作成](#) 85 ページを参照してください。

注記

OpenLab CDS v2.8 に含まれるリストアユーティリティ (Agilent OpenLab Restore Utility v1.0) は、OpenLab CDS v2.8 からのバックアップのみリストアできます。前のバージョンからのソフトウェアアップグレードはサポートしていません。2.7 環境で OpenLab CDS 2.7 のバックアップをリストアするには、OpenLab CDS v2.7 インストールメディアのバックアップおよびリストアユーティリティを使用してください。アップグレードについては、Upgrade to ProductName Version CurrentRevisionを参照してください。

バックアップのコンテンツ

OpenLab CDS Workstation Plus は、ローカルファイルシステムにファイルおよびインデックスを保存します。フォルダーの場所は、製品のインストール時に決定します。フォルダー情報、監査証跡、署名などのその他のデータは、データベースに保存されます。

フルバックアップは、OpenLab CDS Workstation Plus からデータベース、構成ファイルおよびインストーラーファイルや、コンテンツ管理システムにアップロードされたすべてのファイルを含む、完全なデータセットを取り込みます。差分バックアップは、前回のフルバックアップ以降に発生した変更だけをバックアップします。差分バックアッププロセスは、フルバックアップよりも短時間で済みます。

フルバックアップは次のものが含まれます。

- コンフィグレーションファイル
- Shared Services、ローカルの Secure Storage、および Data Repository のデータベース
- コンテンツのストレージロケーション
- 証明書サーバー

必要な領域

バックアップ手順に必要な空き領域は、システムコンフィグレーション、バックアップロケーション、データベースのバックアップサイズなど、複数の要因によって異なります。空き容量は、オンプレミスに保存される容量の少なくとも 2 倍必要です。以前成功したバックアップが、何らかの理由で途中で終了したバックアップに上書きされるのを避けるためです。

コンフィグレーション

バックアップおよびリストアユーティリティでは、バックアップ/リストア中の一時的なバックアップロケーションとして特定のフォルダーを使用します。[PostgreSQL データベースのカスタムデータディレクトリの設定](#) 96 ページを参照してください。

差分バックアップを実行する場合、最初に OpenLab CDS および Data Repository PostgreSQL データベースを設定する必要があります。[PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート](#) 94 ページ を参照してください。

バックアップログ

バックアップユーティリティのログは、`%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Backup` フォルダーに保存されます。バックアップ中にすべてのステップが確認され、失敗したステップで手順が停止します。失敗したステップのリンクから、現在のバックアップログファイルを開き、失敗の原因を特定します。バックアップが失敗した場合、バックアップロケーションの Temp フォルダーにバックアップの一部が保存されます。

障害復旧プランの作成

OpenLab CDS が、ハードウェアやソフトウェアの不具合により操作不能になるという予期せぬ事態に備えて、復旧プランを準備してください。このプランには、オペレーティングシステムを完全にリストアするためのすべての情報と手順を含める必要があります、ソフトウェアおよびデータのバックアップロケーションを物理的に異なるマシンに指定する必要があります。障害復旧プランが機能することを、あらかじめ確認しておいてください。

障害復旧プランには次の情報を含める必要があります。

- ハードウェア情報：CPU、メモリ、およびハードディスクのコンフィグレーション情報
- コンピューター ID：名前、IP、ドメイン、URL など
 - コンピューターの管理者情報：ユーザー名とパスワード
 - データベースにログインするユーザー名とパスワード（必要であれば）
- ターゲットシステム上（バックアップのリストア先）のデータベースのすべてのユーザー名とパスワードがソースシステム上（バックアップ元）のものと同一である必要があります。
- ソフトウェア情報：OS バージョン、パッチレベル

- インストールパラメータ：
 - インストールフォルダー
 - インストールログファイル
 - ストレージロケーション
 - Shared Services データベース名
 - インストールライセンス
- サードパーティソフトウェア情報：アプリケーションとその更新、およびインストールパス
- バックアップ手順（[バックアップ手順](#) 87 ページ を参照）。
- バックアップメディアのロケーションと構成の詳細
- リストア手順（[リストア手順](#) 97 ページ を参照）。

バックアップ手順

バックアップ中のウィルス対策スキャン

注意

バックアップ中にウィルス対策スキャンが行われると、バックアップが正常に完了できない場合があります。

- 1 定期的/スケジュール済みスキャンとリアルタイム保護の両方でバックアップロケーションが除外されていることを確認してください。
リアルタイム保護からバックアップロケーションを除外できない場合やリアルタイム保護をオフにできない場合、最終的なバックアップタスクが正常に完了しない可能性があります。
- 2 バックアップ中にウィルス対策スキャンが実行される場合、バックアップが正常に完了したか確認してください。

- ・ バックアップが完了したら、バックアップロケーションにある「Current」（または「Current」および「Incremental」）のサブフォルダーを確認します。
- ・ バックアップ時間に対応するログファイルに、「The backup has completed」と最後に記載されたエントリが含まれているか確認します。バックアップログは
%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Backup フォルダーに保存されます。

- 3 再試行ポリシーを変更します。

デフォルトでは、バックアップユーティリティツールは 10 秒間隔でバックアップが完了するよう 3 回試行します。

バックアップの完了設定を変更するには、

%ProgramData%\Agilent\Installation フォルダーにある configuration.xml ファイルの

<Backup> <BackupFinalizationSettings> セクションの Delay および Retry プロパティを変更します。このファイルを更新できるのは、システム管理者権限を持つユーザーのみです。設定できる値は、Delay は 0 より大きい値、Retry は 1 より大きい値です。

新しい値はバックアップ中に適用されます。即時バックアップの場合、処理中ページの最初のステップで適用され、定期的なバックアップの場合、バックアップの開始時に適用されます。

バックアップユーティリティの使用

準備

- バックアップユーティリティを実行するにはシステム管理者権限が必要です。
- すべてのロールを持つ OpenLab CDS アカウントが必要です。
- 差分バックアップを使用するには、最初に設定する必要があります
([PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート](#) 94 ページ を参照)。その設定に基づいたフルバックアップが必要です。

- 1 スタート > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies >
バックアップユーティリティからバックアップユーティリティを開始します。ユーザーアカウント制御アクセスのリクエストが表示された場合、はいをクリックします。

ステータスページに、前回完了したバックアップの日付と時刻が表示されます。リンクをクリックするとバックアップロケーションが表示されます。

定期的なバックアップがスケジュールされている場合、現在のバックアップステータスと次回バックアップの開始日時が表示されます。

バックアップが現在実行中の場合、ステータスが**実行中**と表示されます。定期的にスケジュールされたバックアップが失敗した場合、ステータスに**失敗**と表示されます。

前回完了したバックアップに、前回成功したバックアップ
(定期的なバックアップまたは即時バックアップタイプ) が実行された日時とそのロケーションが表示されます。バックアップに成功するとこの情報が表示されるようになります。

注記

タイムゾーンが変更された場合は、システムを再起動してください。再起動しないと、ステータスページの日時が一致しないことがあります。

- 2 バックアップオプションページで、設定するオプションを選択します

- 定期的なバックアップ
自動バックアップの手段としてこのオプションを使用します。自動バックアップをスケジュールすることをお勧めします。
- 即時バックアップ
ホットバックアップまたはコールドバックアップがすぐに開始されます。
定期的なバックアップへの影響はありません。

バックアップ設定の正確性チェックや 1 回のバックアップで必要なディスク領域と所用時間を確認するのに役立ちます。さらに、このオプションはリストア手順全体のテストの一部にすることができます。

3 設定ページで、バックアップの設定をします。

- 定期的なバックアップの場合、バックアップを有効にし、スケジュールを設定します。

定期的なバックアップを有効にすることを強くお勧めします。

定期的なバックアップを有効にするチェックボックスをオフにすると、スケジュールされたバックアップは実行されません。メンテナンス中などは、定期的なバックアップを無効にしてください。メンテナンスが完了したら、忘れずに定期的なバックアップを再度有効にしてください。

バックアップ中にシステムを利用するかどうか選択します（ホットバックアップの場合は**はい**、コールドバックアップの場合は**いいえ**）。

差分バックアップを有効にします。差分バックアップの時間と曜日を入力します。スケジュールの時間には 24 時間形式を使用します。

フルバックアップと差分バックアップを同じ曜日にスケジュールすると、フルバックアップが実行されます。

定期的なフルバックアップが失敗した場合、次の定期的なフルバックアップが成功するまでは、差分バックアップは失敗します。差分バックアップが失敗しないようにするには、定期的なバックアップに指定されたロケーションに即時バックアップを実行します。

- 即時バックアップの場合、バックアップ中にシステムを利用するかどうかを選択します。ホットバックアップの場合は**はい**、コールドバックアップの場合は**いいえ**を選択します。
 - ホットバックアップ：バックアップ中もシステムは稼働したままとなります。
 - コールドバックアップ：バックアップの前に、バックアップユーティリティが OpenLab CDS のすべてのプロセスを自動的に停止します。

4 バックアップロケーションページで、ローカルファイルシステムのパスを指定します。ネットワークドライブおよび UNC パスはサポートされていません。

バックアップは、現在の Windows ユーザーにアクセス許可がないフォルダーに設定できます。バックアップは常に Windows ビルドイン SYSTEM ユーザーが実行し、成功したバックアップを保存できます。定期的なバックアップは実行されますが、現在の Windows ユーザーは適切な権限がなければ結果を表示できません。

- 5 Shared Services 資格情報ページで、Shared Services 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。検証をクリックして資格情報が有効であることを確認します。

前のバックアップで使用された資格情報が読み込まれています。まだバックアップが実行されていない場合、デフォルトの管理者の資格情報が読み込まれます。

- 6 定期的なバックアップの場合：通知ページで、バックアップ通知を有効に設定できます。即時バックアップの場合、これはスキップされます。

- ・ コントロールパネルで設定された差出人アドレスを使用します。電子メールアドレスの設定方法については、コントロールパネルのオンラインヘルプを参照してください。

複数の送信先アドレスは、カンマで区切ります。各アドレスは長い形式（名前と電子メール）または短い形式（電子メールのみ）で表記できます。

- ・ 件名の接頭語に、電子メール通知の件名の接頭語を指定します。
- ・ テストメッセージの送信を使用して、通知の設定が正しいことを確認します。

- 7 レビューページ：設定を確認します。適用をクリックするとバックアップが開始されるかバックアップスケジュールが保存されます。

- 8 処理中ページで進行状況を確認できます。

- 9 バックアップ完了したら、完了をクリックします。

バックアップの結果

バックアップユーティリティを実行すると、指定したロケーションにバックアップフォルダーが作成されます。バックアップログが同じロケーションに作成されます。

PC > ローカルディスク (C:) > CDSBackup > Current >

名前	更新日時	種類	サイズ
CertificateService	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー	
CM	2023/12/21 18:50	ファイル フォルダー	
Installation	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー	
PostgreSQLDataDir	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー	
ReverseProxy	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー	
Verification	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー	
backup	2023/12/21 18:22	XML ドキュメント	5 KB
Backup_log_12-21-2023(18_22_03.5011821)	2023/12/21 18:22	テキストドキュメント	34 KB

注記

バックアップは時間がかかることがあります。バックアップが次回の定期的なバックアップまでに完了しない場合、次回の定期的なバックアップはスキップされます。最初のバックアップが完了すると、設定されたバックアップスケジュールが再開されます。

バックアップのステータスと所要時間に関する情報はバックアップログで入手できます。必要に応じてスケジュールを調整してください。

最後に実行したバックアップタスク中にバックアップが失敗した場合、バックアップロケーションの Temp フォルダーにバックアップの一部が保存される場合があります。

PC > ローカルディスク (C:) > CDS_Backup >

名前	更新日時	種類	サイズ
Current	2022/05/05 10:43	ファイル フォルダー	
Temp	2022/05/05 10:45	ファイル フォルダー	

Temp フォルダーに backup.xml ファイルが含まれている場合はバックアップが成功したと見なされることがあります。この場合は、Temp フォルダー名を以下のように変更できます。

- フルバックアップを実行した場合、Temp フォルダー名を Current に変更します。

- ・ 差分バックアップを実行した場合、Temp を Incremental に変更します。

バックアップが失敗した場合、バックアップログを確認します。たとえば、定期的なバックアップの実行前に Shared Services 資格情報が無効になったためにバックアップがスキップされる場合があります。その場合は、バックアップユーティリティから無効な資格情報を変更してください。

注記

アドレスやストレージタイプなどのストレージロケーションの設定を変更できます。また、ストレージロケーション間でデータを再配置できます。これらの手順の途中でフルバックアップや差分バックアップが実行された場合、システムは中間ステータスになり後で正しくリストアできなくなる可能性があります。

このため、ストレージロケーションの設定を変更した場合は、次のリストア手順を実行する前にフルバックアップを再度実行してください。さらに、差分バックアップをスケジュールを再設定してください。

バックアップバリデーション

バックアップバリデーションでは、バックアップの完了後にバックアップされたデータを検証します。バックアップ後に 2 種類のレポートが作成されます。どちらのレポートも Verification サブフォルダーに保存されます。

- ・ VerificationReport.xml - ファイルやそれらのハッシュ、データベースのエンティティなど、バックアップされた技術情報が含まれます。リストアの場合、ファイルとデータベースのエンティティの比較にこのレポートが使用されます。
- ・ VerificationReport.html - バックアップに関する情報、バリデーションされたファイルの数、不合格に関するファイル情報、およびデータベースエンティティのバリデーション結果が、人が読み取れるビューで表示されます。

バリデーションでは、メインエンティティ（ファイル、データベースエンティティ）が適切にバックアップされているか確認します。バリデーションするファイルの数は、バックアップコンフィグレーション後にコンフィグレーションファイルで指定します（デフォルトでは 10 %）。バックアップ実施後にファイルが検証され、レポートに含まれます。リストアの場合、レポートに含まれているすべてのエンティティが検証されます。バックアップ開始時間後に変更されたエンティティ（またはそのバージョン）はレポートに含まれず、リストア実施中にバリデーションされません。

ファイルのバリ デーション

ファイルのバリデーションは、以下のロジックが使用されます。

- バックアップユーティリティは、最初にバックアップされたすべてのファイルをカウントし、全ファイルの 10 % をランダムに使用します。バリデーションに使用されるファイルのパーセントは切り上げられます。たとえば、3 ファイルの 10% は 0.3 であるため、この値は 1 に切り上げられます。このようにして、このツールが 1 つ以上のファイルをバリデーションします。
- 次に、各ファイルのランダムなバージョンをユーティリティが取り出します。たとえば、1 つのファイルに 3 種類のリビジョンがある場合（1.0、2.0、3.0）、ユーティリティはランダムにリビジョンを選択し、取り出します。
- バリデーションでは、削除されたファイルを除外します。
- バリデーションは、バックアップされたファイルのチェックサムおよびサイズと、コンテンツ管理システムのファイル情報を比較します。チェックサムが等しい場合、バリデーションは合格です。そうでない場合、バリデーションは不合格です。

バリデーションするファイルの数は、`%ProgramData%\Agilent\Installation` フォルダーにある `configuration.xml` ファイルで設定できます。このファイルを更新できるのは、システム管理者権限を持つユーザーのみです。Backup セクションで以下のプロパティを変更します。

- **PercentFilesVerification**：バリデーションするファイルの割合（デフォルトでは 10%）。設定できる値は 1 から 100 までです。負の値や小数の値、100 を超える値は設定できません。
- **TotalFilesVerificationLimit**：バリデーションするファイルの上限（デフォルトでは 10 000）。設定できる値は 0 より大きい値です。負の値や小数は設定できません。

新しい値はバックアップ中に適用されます。即時バックアップの場合、処理中ページの最初のステップで適用され、定期的なバックアップの場合、バックアップの開始時に適用されます。

Shared Services レコードのバリ デーション

Shared Services レコードのバリデーションでは、バックアップ時点のレコードの数を確認します。次のレコードがカウントされます。

- プロジェクト
- 機器
- ユーザー
- アクティビティログエントリ

PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート

PostgreSQL は差分バックアップ戦略を備えています（継続的アーカイブ）。継続的アーカイブを有効にすると、PostgreSQL はデータベースのデータファイルに加えられたすべての変更を先行書き込みログ（WAL：Write Ahead Log）に記録します。ファイルシステムレベルのバックアップと WAL ファイルのバックアップを組み合わせるという戦略です。

継続的アーカイブを使用して正常に復旧させるには、少なくともバックアップの開始時間まで遡る連続的な一連のアーカイブされた WAL ファイルが必要です。このため、最初のベースバックアップの前に、以下のように WAL ファイルのアーカイブ手順を設定してテストしてください。

PostgreSQL の WAL ファイルのアーカイブ設定

差分コンフィグレーションツールは、OpenLab CDS Workstation Plus で使用するすべての PostgreSQL インスタンスの差分バックアップを自動的に設定できます。ツールによって以下のアクションが実行されます。

- OpenLab CDS PostgreSQL の差分バックアップの設定を更新。
 - 更新後に必要な PostgreSQL サービスの再起動。
 - バックアップユーティリティの BackupUtility.config ファイルを差分バックアップ有効に更新。
- 1 管理者としてコマンドプロンプトを実行します。
 - 2 ツールのインストールパスへ移動します。デフォルトでインストールした場合は、
C:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility\Incremental Config Tool です。
 - 3 以下のパラメータを使用して差分コンフィグレーションツールを実行します。

-on or	必須：差分バックアップを有効にしてデフォルトパスを設定するか、差分バックアップを無効にします。
-off	
-olcmWalDir <path>	オプション：OpenLab CDS PostgreSQL データベースの指定されたパスを設定します。パラメータが「on」の場合のみ。

例：

- 差分バックアップを有効にし、デフォルトパスを設定します。
`PgIncrementalConfigTool.exe -on`
- 差分バックアップを無効にします。`PgIncrementalConfigTool.exe -off`
- 差分バックアップを有効にし、特定のパスを設定します。
`PgIncrementalConfigTool.exe -on -olcmwalDir D:\wal\olcm`

ツールが PostgreSQL データベースを設定し、PostgreSQL サービスを再起動します。正常に完了すると、**Configuration completed successfully** というメッセージが表示されます。エラーが発生した場合、**PgIncrementalConfigTool has failed. The log files: <ログファイルのパス>** というメッセージが表示されます。

PostgreSQL データベースのカスタムデータディレクトリの設定

- 1 現在の PostgreSQL サービス設定を取得するには、次のコマンドを実行します。 `sc qc postgresql-x64-15-dr`
-D オプションの後に現在のデータの保存場所が表示されます。
- 2 PostgreSQL の `postgresql-x64-15-dr` サービスを停止します。
- 3 現在のデータの保存場所にあるコンテンツを新しい保存場所へ移動します。
- 4 PostgreSQL サービス設定を変更して新しいデータ保存場所を設定するには、次のコマンドを実行します。例：

```
sc config postgresql-x64-15-dr binPath="\"C:\Program Files  
(x86)\PostgreSQL\15\bin\pg_ctl.exe\" runservice -N \"postgresql-  
x64-15-dr\" -D \"E:\NewDataLocation\" -w\"
```
- 5 PostgreSQL サービスのレジストリ値を更新します。以下のキーで新しいデータ保存場所を設定します。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\PostgreSQL\FB5FABF4-6023-4975-A98D-A435C547CAC1\Installations\postgresql-x64-15\DataDirectory
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\PostgreSQL\FB5FABF4-6023-4975-A98D-A435C547CAC1\Services\postgresql-x64-15\DataDirectory
- 6 `postgresql-x64-15-dr` サービスを開始します。

リストア手順

リストアユーティリティによって、バックアップユーティリティで作成されたコールドバックアップとホットバックアップからシステムをリストアできます。リストアユーティリティは、OpenLab CDS がインストールされたシステムやクリーンなシステム上で実行できます（[OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされていないクリーンなマシンのリストア](#) 100 ページを参照）。ハードウェアやソフトウェアの不具合により操作不能になった場合、リストアユーティリティを使用して既存のバックアップから Workstation Plus をリストアします。

リストア手順は、成功したバックアップで取り込まれたコミット済みデータのみリストアします。バックアップの開始後に作成または更新されたデータは、そのバックアップからリストアしても復旧されません。AWS S3 ロケーションまたは UNC パスからの再構成やリストアは、Workstation Plus ではサポートされていません。

注記

OpenLab CDS v2.8 に含まれるリストアユーティリティ（**Agilent OpenLab Restore Utility v1.0**）は、OpenLab CDS v2.8 からのバックアップのみリストアできます。前のバージョンからのソフトウェアアップグレードはサポートしていません。2.7 環境で OpenLab CDS 2.7 のバックアップをリストアするには、OpenLab CDS v2.7 インストールメディアのバックアップおよびリストアユーティリティを使用してください。アップグレードについては、Upgrade to ProductName Version CurrentRevisionを参照してください。

注記

バックアップされたシステムの PostgreSQL の差分バックアップ設定でデフォルト以外のパスを使用している場合は、リストア後に[PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート](#) 94 ページの指示に従ってください。

リストアログ

リストアユーティリティのログは、%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Restore フォルダに保存されます。リストア中にすべてのステップが確認され、失敗したステップでリストア手順が停止します。失敗したステップのリンクから、現在のリストアログファイルが開き、失敗の原因を特定します。リストアコン

フィグレーション中に各ページでバリデーションされ、バックアップデータへのアクセス権の欠如、形式の誤りにより発生する可能性があるエラーが防止されます。

既存の OpenLab システムのリストア

リストアユーティリティで、OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされたシステムのリストアをします。以下の手順のように、バックアップユーティリティを使用してバックアップされたインストール済みシステムをリストアします。

準備

- リストアユーティリティを実行するには、システム管理者権限を持っている必要があります。
 - バックアップを含むフォルダーにアクセスできるように、このフォルダーの読み取り権限を持つユーザーがアプリケーションを起動してください。
 - すべてのロールを持つ OpenLab CDS アカウントが必要です。
- 1 リストアプロセスを実行する前に、OpenLab CDS Workstation Plus のすべての動作を停止してください。
 - 2 リストア中は、機器またはシステムのその他の部分がシステムを使用しないようにしてください。
 - 3 Windows のスタートメニューから、（すべてのアプリ >）
Agilent Technologies > リストアユーティリティを選択します。
 - 4 リストアコンフィグレーションページで、バックアップロケーションとリストアモードを選択します。

バックアップがローカルまたは Windows 共有に配置されている場合、**ファイルシステム**をバックアップロケーションとして選択します。バックアップユーティリティで使用されたバックアップフォルダーを選択します。

適切なリストアモードを選択します。

- バリデーションをスキップするには**リストアのみ**を選択します。
- リストアと一部のバリデーションがデフォルトで選択されています。このオプションでは、アクティビティログインデックスを再構築するためにマニュアル手順を後で実行する必要があります。

- ・ アクティビティログインデックスを自動的に再構築するには、リストアとフルバリデーションを選択します。アクティビティログインデックスの再構築に要する時間は、アクティビティログレコードの数によって異なります。数時間かかることもあります。
- ・ すでにシステムをリストア済みの場合、バリデーションのみを選択します。

次へをクリックします。

- 5 バリデーションを含むモードを選択し、システムのドメイン認証が有効の場合：**Shared Services 資格情報**ページで Shared Services 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。最後にバックアップしたときの資格情報があらかじめ読み込まれています。

検証をクリックして資格情報が有効であることを確認します。

- 6 レビューページで設定を確認し、適用をクリックします。

処理中ページでリストア手順の進行状況を確認できます。

- 7 バリデーションステップが含まれる場合、バリデーションステータスの完了をクリックすると、バリデーションレポートが開きます。

- 8 リストア手順が完了したら、リストアユーティリティの完了をクリックします。

- 9 OpenLab CDS Workstation Plus システムをリストアし、再起動します。

システムをすぐに再起動するには、はいを選択します。再起動を後で手動で実行する場合は、いいえを選択します。

- 10 リストアのみまたはリストアと一部のバリデーションを選択した場合：アクティビティログインデックスを再構築します（[アクティビティログインデックスのマニュアル再構築](#) 102 ページ を参照）。

可能性のあるエラー

Agilent OpenLab Shared Services サービスは開始されていません。NET HELPMMSG 3521 と入力すると、より詳しい説明が得られます。

考えられる原因	対策
Agilent OpenLab SharedServices サービスがすでに停止されています。	<ul style="list-style-type: none"> 代わりに以下のコマンドを実行します。 <code>del /s /f /q %ProgramData%\Agilent\OLSS\Index\ActivityLog && net start SharedServicesHost</code>

システムエラー 5 が発生しました。アクセスが拒否されました。

考えられる原因	対策
コマンドプロンプトに十分な権限がありません。	<ul style="list-style-type: none"> コマンドプロンプトを管理者として実行してください。

OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされていないクリーンなマシンのリストア

この手順を使用して、バックアップされた OpenLab CDS Workstation Plus を、OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされていないマシンへリストアします。

ユーティリティはすべての PostgreSQL データベースを他の OpenLab CDS データと併せてクリーンなシステムにリストアします。リストア完了後にソフトウェアをインストールする必要があります。

- 1 OpenLab CDS インストールメディアの **Setup > Tools > RestoreTool** から、**RestoreUtility.exe** を起動します。
- 2 リストアコンフィグレーションページで、バックアップロケーションを選択します。

バックアップがローカルまたは Windows 共有に配置されている場合、ファイルシステムをバックアップロケーションとして選択します。バックアップユーティリティで使用されたバックアップロケーションを選択します。

バックアップロケーションとしての AWS S3 や UNC パスは、Workstation Plus ではサポートされていません。

OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされていないマシンにリストアするときは、バリデーションは利用できません。

次へをクリックします。

- 3 データベースサーバーページで次へをクリックします。

PostgreSQL サーバーが利用できないという警告が表示されます。はいをクリックして続行します。

- 4 設定を確認して、適用をクリックします。

- 5 処理中ページでリストア手順の進行状況を確認できます。リストア手順が完了したら、完了をクリックします。

- 6 リストア手順が成功したら、OpenLab CDS の標準インストールに進みます。リストア手順中にレビューおよび設定されたすべての値はインストール中に自動的に使用されるため、プロセス中にそれらを変更しないでください。

- 7 アクティビティログインデックスを再構築します（[アクティビティログインデックスのマニュアル再構築](#) 102 ページ を参照）。

- 8 OpenLab CDS Workstation Plus ソフトウェアのインストール後に、リストアユーティリティのバリデーションのみオプションを実行するとデータを確認し、バリデーションレポートが作成されます。

新しいコンピューター名のアクティブ化

以下の手順は、新しいマシンのコンピューター名がバックアップされたシステムのものとは異なる場合にのみ実行してください。

- 1 Secure Storage の設定を更新します。
 - a コントロールパネルで、管理タブを開きます。
 - b システムコンフィグレーション > システム設定の編集をクリックします。
 - c Secure Storage をストレージタイプとして選択し、次へをクリックします。
 - d 次へをクリックします。
 - e サーバーの変更を選択し、新しいコンピューター名を入力してアクティブ化をクリックします。

- 2 この手順を終了するまで、古いコンピューター名が一時的に応答するようにします。

これは、たとえば **hosts** ファイルを一時的に変更することで実行できます。

- a 管理者として **Notepad** を実行します。
- b **C:\Windows\System32\drivers\etc\hosts** を開きます（ファイルタイプ：すべてのファイルを表示）。
- c 最後に新しい行を入力します。127.0.0.1 <古い PC 名>
- d ファイルを保存します。次の手順の実行中もファイルを開いたままにできます。

- 3 機器を更新します。

- a コントロールパネルで、**機器**タブを開きます。
- b 機器を選択し、**機器の編集**をクリックします。
- c **機器コントローラ**で、新しいコンピューター名を選択します。OK をクリックして保存します。
- d すべての機器に対してこの操作を繰り返します。

- 4 すべての機器を更新したら、機器コントローラから古いコンピューター名を削除します。

- a コントロールパネルで、**管理**タブを開きます。
- b **機器コントローラ**を選択します。
- c 古いコンピューター名を選択し、**機器コントローラの削除**をクリックします。

- 5 **hosts** ファイルを変更した場合、変更を元に戻します。

アクティビティログインデックスのマニュアル再構築

リストア後にアクティビティログを検索するには、インデックスが完全に再構築されている必要があります。

バリデーションなしか、一部のバリデーションでシステムをリストアした場合、マニュアルで再構築を実行してください。アクティビティログレコードのリストアをバリデーションする前に、アクティビティログインデックスが再構築されている必要があります。

インデックスの再構築に要する時間は、アクティビティログレコードの数によって異なります。数時間かかることもあります。この処理中は、アプリケーションでアクティビティログの検索はできません。

アクティビティログを再構築するには：

- 1 管理者としてコマンドプロンプトを開始します。
- 2 ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab\Services\Activity Log Service に移動します。
- 3 ファイル **Agilent.OpenLab.ActivityLog.Tools.Albit.exe** を以下のパラメータで実行します。

rebuild-index	古いインデックスを削除する前に確認があります。その後で新しいインデックスが構築されます。
--force	オプション：確認の必要なし。
--continue	オプション：最初に古いインデックスを削除せずに、最後の実行が停止した場所から再構築を続ける。このオプションでは、タイムアウト後に全プロセスを再度開始する必要はありません。

リストアバリデーション

OpenLab ソフトウェアがインストール済みのシステムでのみバリデーションを利用できます。

バリデーションレポートは

%ProgramData%\Agilent\Restore\Verification に保存されます。

リストアユーティリティのログは、

%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Restore に保存されます。

リストア中に各ページでバリデーションが実施され、コンテンツおよびアーカイブロケーションへのアクセス権の欠如、形式の誤りなど、発生する可能性があるエラーが防止されます。失敗したステップで停止します。失敗したステップのリンクから、現在のリストアログファイルが開き、失敗の原因を特定します。

Shared Services リストアバリデーションには以下のリストアアイテムのカウントが含まれます。
レコードのバリ
デーション

- プロジェクト
- 機器
- ユーザー
- アクティビティログエントリ

バリデーションは、バックアップされたアイテムの数と、リストアされたアイテムの数を比較します。リストアバリデーション数がバックアップバリデーションと異なる場合、リストアバリデーションが**失敗**と表示されます。

ルーチンメンテナンス

ルーチンメンテナンスは定期的に行う必要があります。これらは Secure Storage データベース、Shared Services、および Data Repository データベースに関連しています。また、OpenLab サーバーによって提供されています。

以下のトピックに関する詳細は、『Agilent OpenLab Server および OpenLab ECM XT 管理者ガイド (openlab-server-ecmxt-v2.8-administration-guide-ja.pdf, D0035354ja)』を参照してください。

- リソース使用量のモニタ
- データベース統計の更新
- その他の最適な方法

トラブルシューティング

OpenLab CDS PC の動作が遅い

新しいデータ解析または測定クライアントを起動するには時間がかかります。多くの CDS インスタンスが PC で実行されます。

考えられる原因	対策
PC で利用可能なメモリが不足すると、Microsoft Windows はハードドライブへメモリのスワップアウトを開始します（メモリページング）。	<ul style="list-style-type: none">• メモリの空き容量を増やすため、不要なアプリケーションを閉じてください。不要になった OpenLab クライアントを閉じ、同じマシンで実行するその他のアプリケーションを閉じることを検討してください。• HDD（スピンドルドライブ）の代わりに SSD ハードドライブを使用することを検討してください。メモリスワッププロセスにより大幅に高速化されます。• 問題が解決しない場合：メモリの追加を検討してください。

ソフトウェアの最初のインスタンスを開くのが遅い

ソフトウェアアプリケーションの最初のインスタンスを開くのが、その後の使用時よりも遅くなります。この遅れは使用頻度の低いアプリケーションの場合にも見られる場合があります（例：Sample Scheduler から OpenLab Data Analysis を読み込むと、データ解析の動作が遅くなる場合があります）²。

2 一定時間操作を行わないとキャッシュが空になるため、時間が経過してから使用すると初めて使用するときと同様になる場合があります。

考えられる原因	対策
<p>アプリケーション DLL の初回の読み込みは、以降、同じアプリケーションを使用するためにメモリがキャッシュされることから、初回のアプリケーションの読み込みには時間がかかります。メディアからの DLL の読み取りによって、初回の時間は異なります。以降、DLL の使用はメモリから読み取ります。このため、アプリケーションの初回（頻度の低い）使用時の起動時間がその後の使用時と比較して異なる場合があります。²</p>	<ul style="list-style-type: none">• HDD（スピンドルドライブ）の代わりに SSD ハードドライブを使用することを検討してください。SSD からの読み取り時間は HDD より大幅に高速化され、多くの場合にこの初回のアプリケーション起動時間（DLL 読み取り）が解消します。

OpenLab CDS バージョン 2.8 への アップグレード

ライセンスアップグレード 109

アップグレードライセンスファイルの取得 109

システムへのアップグレード済みライセンスファイルの追加 111

OpenLab CDS Workstation Plus を最新バージョンへアップグレード 112

アップグレード後のタスク 117

新規または更新された項目 118

ライセンスアップグレード

アップグレードライセンスファイルの取得

OpenLab CDS の次のバージョンへアップグレードする前に、SubscribeNet でライセンスをアップグレードする必要があります。コアソフトウェアをアップグレードする前にワークステーションのライセンスをアップグレードすることを強くお勧めします。新しいライセンスなしでスタンドアロンワークステーションを新しいバージョンのコアソフトウェアにアップグレードした場合、そのワークステーションは、コントロールパネルに新しいワークステーションライセンスが追加されるまでは機能しません。

SMA を契約している場合は、次の手順でライセンスをアップグレードできません。

- 1 以下のプロセスで、OpenLab CDS がインストールされているワークステーションのホスト名または MAC アドレスを SubscribeNet に入力するよう要求されます。

ホスト名および MAC アドレスを取得するには、コントロールパネルを開き、**管理 > ライセンス**セクションへ移動します。ホスト名を記録し、**MAC アドレスのコピー**または **MAC アドレスの保存機能**を使用して MAC アドレスを取得します。

- 2 Agilent Electronic Software and License Delivery (<https://agilent.subscribe.net/>) にログインします。

OpenLab CDS バージョン 2.8 へのアップグレード ライセンスアップグレード

- 3 **Manage License by Host** へ移動します。Host ID フィールドに、メモしておいた MAC アドレスを入力し、**Search** をクリックします。

Software	Electronic Software and License Delivery
Product List	Manage Licenses by Host
Product Search	Manage Licenses by Host provides a convenient way to upgrade or return all licenses for a license server. For nodelocked license Hosts, licenses can only be returned as upgrades do not apply.
Entitlements	Please select a host by entering the Host ID or Host Name in its search field, or select a host from the pull-down list. You can use * as a wildcard value.
Licenses	
Register Authorization Code	Host ID <input type="text"/> What is my Host ID?
Generate or View Licenses	Host Name <input type="text"/>
View Licenses by Host	<input type="button" value="Search"/>
Manage Licenses by Host	
Administration	
Account Members	
Change Password	

該当するホスト名が表示されない場合、複数の SubscribeNet アカウントでライセンスを管理している場合があります。これらのアカウントにログインしてライセンスをアップグレードする必要があります。

- 4 ライセンスをアップグレードする資格がある場合、**Upgrade All** ボタンが表示されます。これが表示されないときは、Agilent の営業担当者にご連絡いただき（[営業およびサポートのお問い合わせ先](#) 135 ページ を参照）ソフトウェアメンテナンス契約を更新する必要があります。アップグレードライセンスを作成するときは、**[Generate]** ボタンをクリックしてください。
- 5 **Upgrade All Licenses for License Host** ページで、データを見直し、**Upgrade All** をクリックして確定します。

これによりライセンスファイルが最新バージョンにアップグレードされます。SubscribeNet からお客様に、新しいライセンスファイルの添付された電子メールが送信されます。

- 6 システムに新しいライセンスファイルを追加します（[システムへのアップグレード済みライセンスファイルの追加](#) 111 ページ を参照）。

複数のスタンドアロンワークステーションを使用している場合、各ワークステーションでこの手順を繰り返します。

各ワークステーションの MAC アドレスがファイル名であることにご注意ください。これはワークステーションのコントロールパネルでインポートするライセンスファイルを正しく特定できるようにするためです。

システムへのアップグレード済みライセンスファイルの追加

追加の機器コントロールやクライアントライセンスなど、新しいオプションを購入した場合や、SubscribeNet でライセンスを再作成した場合には、システムにアップグレードライセンスファイルを再適用する必要があります。

- 1 ライセンスをインストールしたいシステムに接続されているマシンから、コントロールパネルを起動します。
- 2 管理 > ライセンスの順に選択します。
- 3 ライセンスを選択し、ライセンスの削除 ✕ をクリックします。
- 4 リボン内のライセンスの追加 + をクリックします。
- 5 SubscribeNet のライセンス作成プロセスで保存したライセンスファイルを参照して開きます。

注記

ライセンスを有効にするために、再起動してください。

OpenLab CDS Workstation Plus を 最新バージョンへアップグレード

現在のバージョンが OpenLab CDS リビジョン 2.8 に直接アップグレードできることを確認してください。直接アップグレードはリビジョン 2.5 以降からサポートされています。

OpenLab CDS v2.5 より古いバージョンは、直接アップグレードをサポートするバージョンへの中間ステップが必要です。

インストールされたすべてのアドオンおよび機器ドライバーの最新バージョンを取得してください。

システムドライブにアップグレードを完了するための十分なディスク領域があることを確認してください。十分なディスク領域がないと、キャッシュ中やその後のアップグレード中にインストーラが失敗する場合があります。ディスク空き領域は、データベースサイズの 2.5 倍が必要です。

ソフトウェアをアップグレードする前に、すべてのアップロードを停止し、ファイルアップロードキューを空にしてください。

アップグレードの前後に、システム全体をバックアップしてください。

注記

OpenLab CDS v2.8 に含まれるリストアユーティリティ (Agilent OpenLab Restore Utility v1.0) は、OpenLab CDS v2.8 からのバックアップのみリストアできます。

- 1 ADFExport や 2D-LC などのアドオンソフトウェアをアンインストールしてください。Sample Scheduler for OpenLab をマニュアルでアンインストールしないでください。

注記

古いリビジョンのアドオンソフトウェアは、OpenLab CDS v2.8 ではサポートされていない場合があります。互換性のないアドオンを実行したり、アップグレード後にそれらをアンインストールしたりすると、データ解析アプリケーションが起動できなくなる可能性があります。

互換性については、各アドオンのマニュアルを確認してください。

- 2 管理者権限を持つユーザーとしてインストールメディアから **setup.exe** ファイルを実行します。
- 3 OpenLab CDS を選択します。

- 4 OpenLab CDS インストーラで、インストール画面を選択します。
- 5 ワークステーション (Secure Storage) を選択します。
- 6 アップグレード準備画面で、システムがバックアップ済みであることを確認します。次へをクリックします。
- 7 使用許諾契約書画面で、Agilent の使用許諾条件を読んで確認します。次へをクリックします。
- 8 サーバー情報画面で接続をクリックします。前のインストールでユーザー認証が要求された場合、管理者のコントロールパネルログイン資格情報を入力します。次へをクリックします。
- 9 コンポーネント資格情報：ソフトウェアコンポーネントで使用するパスワードを入力します。既存のパスワードが要件を満たしていない場合、新しいパスワードの入力を求められる場合があります。

パスワードは以下の一般的なガイドラインに従う必要があります。

- 最小 8 文字
- 大文字 1 文字以上
- 小文字 1 文字以上
- 数値 1 つ以上
- 使用可能な文字のみを含める

使用可能な全文字：

- 大文字 A-Z
- 小文字 a-z
- 数値 0-9
- 特殊文字：!@#\$%^&+_=

注記

パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

次へをクリックして続行します。

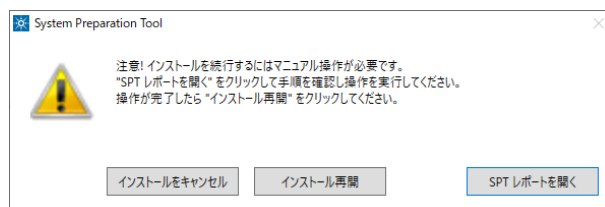
- 10 アップグレードウィザードはシステム準備画面にシステムの推奨設定リストを表示します。システムに適用する必要のない項目のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はアップグレード時に自動的に適用されます。必須設定と推奨設定の概要は、『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v2.8_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』の System Preparation Tool の章を参照してください。

OpenLab CDS バージョン 2.8 へのアップグレード

OpenLab CDS Workstation Plus を最新バージョンへアップグレード

次へをクリックしてレビューページへ進みます。設定はインストールの一環として適用されます。

- 11 レビュー画面で、アップグレードをクリックしてアップグレードを開始します。
- 12 オペレーティングシステムでユーザーアクションが必要な場合、以下の警告が表示されます。



続行するオプション

- ・ 推奨設定：SPT レポートを開くをクリックし、必要な操作セクションで更新が必要かどうかを確認します。操作が完了したら、インストール再開をクリックします。
 - ・ インストールをキャンセル：インストールが中断されます。必要な更新を行ってインストールを再開します。
 - ・ インストール再開：設定が適用されていない場合でも、ダイアログが閉じ CDS コンポーネントのインストールが続行されます。必要に応じて、インストールが完了した後に設定を更新できます。
- 13 アップグレードタブのすべてのコンポーネントがインストールされたら、次へをクリックします。
 - 14 コンフィグレーション画面で次へをクリックします。

15 完了ページで、ソフトウェアベリフィケーションの起動をクリックします。

16 完了ページ：

- a 再起動チェックボックスをオンのままにします。
- b アップグレードを完了するために、再起動後に OpenLab Database Import/Transfer Service ツールが実行されることを確認します。
- c 完了をクリックします。

ウィザード完了後に必要なマニュアルステップ

1 v2.5、v2.6、または v2.7 のデータを v2.8 へ転送します。

データを転送できるように、OpenLab CDS v2.8 へのアップグレード時に OpenLab Database Import/Transfer Service ツールが自動的にインストールされます。

標準的な Workstation Plus の場合、転送には 60 ～ 90 分かかると予想されます。

- a 再起動後に、スタートメニューの OpenLab Database Import/Transfer Service ツールに移動します。ツールを右クリックし、**管理者として実行**を選択します。ツールにより、必要なヘルスチェックがすべて自動的に実行されます。
- b チェックが成功したら、**開始**をクリックします。
- c データの転送が完了したら、**レポートの表示**をクリックして確認レポートを表示します。
- d **確認**をクリックして、転送に完了のマークを付けます。**確認**をクリックしないと、Windows の再起動時に OpenLab Database Import/Transfer Service ツールが表示され続けます。

2 互換性のあるリビジョンのアドオンをインストールします。

3 機器ドライバーを最新バージョンにアップグレードします。

ドライバーのアップグレードの詳細については、[アドオンドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード](#) 29 ページを参照してください。

4 GC/MS 機器を使用している場合：GC/MS ファームウェアを最新バージョンにアップグレードします。GC/MS ソフトウェアを OpenLab CDS 2.8 上で正常に動作させるためにはアップグレードが必要です。

- 5 権限または署名レベルの調整が必要かどうか確認します（[新規または更新された項目](#) 118 ページ を参照）。
- 6 アップグレードを完了する前に、システム全体をバックアップしてください。Backup Proceduresを参照してください。

注記

アップグレード前のバックアップは、アップグレード後のシステムと互換性がないため、使用できなくなります。

アップグレード後のタスク

バージョン 2.8 へのアップグレードでは、OpenLab CDS の PostgreSQL データベースインスタンスを置き換えます。前のデータベースを無効にするには、次の手順に従ってください。

- レガシーサービス **olcm-postgresql-x64-11** (v2.5 または v2.6) または **olcm-postgresql-x64-14** (v2.7) を停止し、無効にします。PostgreSQL 15.x サービスは停止しないでください。
バリデーション：Web ブラウザを開き、
<https://localhost/openlab-storage/> と入力します。
レガシーサービスを無効にしても、Content Browser ログインページがエラーメッセージなく開く場合、更新後のコンテンツ管理システムには影響しません。

次のステップはオプションです。ディスク空き領域を増やすことができます。データ損失を防ぐため、慎重に説明に従ってください。

- 設定 > アプリと機能へ移動し、レガシー PostgreSQL データベースの PostgreSQL - OLCM をアンインストールします。
バリデーション：Web ブラウザを開き、
<https://localhost/openlab-storage/> と入力します。レガシー PostgreSQL データベースをアンインストールしても、Content Browser ログインページがエラーメッセージなく開く場合、更新後のコンテンツ管理システムには影響しません。
- エクスプローラーを開き、レガシーデータベースフォルダー
%ProgramData%\Agilent\PostgreSqlData-11-OLCDS (v2.5 または v2.6) または
%ProgramData%\Agilent\PostgreSqlData-14-OLCDS (v2.7) を削除します。
PostgreSQL 15.x サービスの実行中は、使用中のデータベースフォルダーが誤って削除されないようになっています。
- ドライブ:\DSdata\DSIndex フォルダーのコンテンツを削除します。
ドライブ:\DSdata\ フォルダーの他のコンテンツは、変更したり削除しないでください！
- エクスプローラから、
%ProgramData%\Agilent\OLSS 内のインデックスフォルダーを削除します。
古いアクティビティログインデックスが含まれています。

新規または更新された項目

権限およびロール

以前のバージョンからアップグレードすると、新しい権限およびロールが作成される場合があります（ロールと権限の詳細については「付録」を参照）。

例：

- Shared Services バージョン 3.6 / OpenLab CDS 2.7 から、**アクティビティログの表示権限**が追加されています。この権限はアクティビティログおよび監査証跡を表示するために必要です。この権限は、新しいロール**アクティビティログのアクセス**にデフォルトで割り当てられています。アップグレード時に、この新しいロールは既存のすべてのユーザーおよびグループに自動的に割り当てられます。

アクティビティログの表示権限は、デフォルトのロール**システム管理者**にも自動的に追加されています。

- 以前のバージョンでは、生データのインポートは**化学者**ロールの**データのインポート**権限に含まれていました。Shared Services バージョン 3.7 / OpenLab CDS 2.8 から、**生データのインポート**権限が追加されています。この権限は ChemStation または EZChrom の生データをインポートするときに必要です。

この新しい権限はどのロールにも自動的に追加されません。**化学者**ロールに生データのインポートを引き続き許可する場合、新しい権限をマニュアルで追加してください。

署名レベル

OpenLab CDS 2.8 から、電子署名の署名レベルに結果セットの作成者を含めたり除外したりできます。署名ステップへ作成者を追加する詳細については、OpenLab Help and Learning を参照してください。



10 OpenLab CDS のアンインストール

OpenLab CDS のアンインストール 120

OpenLab Help and Learning のみアンインストール 121

トラブルシューティングのヒント 122

OpenLab CDS のアンインストール

- 1 管理者としてログインします。
- 2 Windows の設定で、**アプリ > アプリと機能**を開きます。
- 3 インストールした OpenLab CDS アドオンは個別にアンインストールします（ADExport for OpenLab など）。
- 4 Agilent OpenLab CDS を選択し、アンインストールを許可します。
OpenLab CDS アンインストールウィザードが開きます³。ウィザードのアンインストールをクリックし、ウィザードに従います。
- 5 Windows の設定の**アプリ > アプリと機能**から、以下の機能を削除してアンインストールを続行します。
 - Agilent Software Verification Tool
 - PostgreSQL - OLCM
PostgreSQL をアンインストールすると、データディレクトリは削除されていないという警告が表示されます。削除する場合は、インストール時に定義したフォルダー（C:\¥DSDData など）を手動で削除します。
 - 機器ドライバー
OpenLab CDS によってインストールされたドライバーは自動的にアンインストールされます。その他のドライバーをインストールした場合、手動でアンインストールします。
- 6 再起動します。

3 アンインストールウィザードは、ソフトウェアをインストールするインストールウィザードから開始することもできます。

OpenLab Help and Learning のみ アンインストール

OpenLab Help and Learning のみインストールした場合、次の手順に従ってアンインストールしてください。

- 1 インストールメディアから、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。
- 2 スタート画面で **OpenLab CDS** を選択し、**OK** をクリックします。
- 3 インストールページで、**OpenLab Help and Learning のみ**を選択します。
Agilent OpenLab CDS Help and Learning ウィザードが開きます。
- 4 **Remove** をクリックします。

ウィザードによって OpenLab Help & Learning がシステムから削除されます。
- 5 アンインストールが完了したら、**Finish** をクリックしてウィザードを閉じます。

トラブルシューティングのヒント

必要なディスク領域

OpenLab CDS アプリケーションをリビジョン 2.8 へアップグレードする場合、インストールされているすべてのパッケージが
ドライブ:\ProgramData\Package Cache にコピーされるため、システムドライブに 10 GB 以上のディスク領域が必要となります。USB のコンテンツをコンピュータにコピーする場合、追加で 10 GB のディスク領域が必要となります。

ディスク空き容量不足による失敗

ディスク空き容量が不足していると、インストールが途中で失敗し、ディスク空き容量不足による失敗がログで示されます。

復旧方法

インストールのために十分な領域がない場合、以下の手順に従います。

1. OpenLab CDS アプリケーションをアンインストールし、
%ProgramData%\Package Cache のコンテンツを削除します。
2. OpenLab CDS 2.8 のインストールを再度実行

コントロールパネルの権限 124

プロジェクト権限 125

機器権限 133

管理者権限 133

営業およびサポートのお問い合わせ先 135

コントロールパネルの権限

次に説明されている権限は、コントロールパネルの各種ロールと関連付けることができます。次のロールが使用できます。

- すべて
- アクティビティログのアクセス
- バルクインポートユーザー
- 化学者
- ファイルストレージロケーション管理者
- 機器管理者
- 機器ユーザー
- ロックスケジュール管理者
- プロジェクト管理者
- プロジェクトコンテンツの削除
- Secure Storage 管理者
- Secure Storage 承認者
- Secure Storage アーキビスト
- Secure Storage 投稿者
- Secure Storage コンテンツ削除
- Secure Storage 閲覧者
- ストレージコンフィグレーション管理者
- ストレージロケーション管理者
- システム管理者
- 技術者
- Storage Administration コンテンツの表示

コントロールパネルの **管理 > ロール** で、関連付けられた権限を表示または変更したり、自身のロールを作成したりできます。

プロジェクト権限

表 6: 測定メソッド

名前	説明
測定メソッドの作成と編集	測定メソッドファイル (*.amx) を作成、編集および保存する。
一般ステータスの測定メソッドの使用	ステータスが 一般 の測定メソッドを使用する。

表 7: 監査証跡

名前	説明
メソッド監査証跡設定の変更	メソッドの監査証跡設定を編集および保存する（コントロールパネルのプロジェクトプロパティ）。
監査証跡のレビュー	変更された監査証跡をレビューしたことを確認する。
監査証跡エントリの追加	マニュアルでエントリを追加し、自身のアクションを監査証跡に記録する。

表 8: コントロール

名前	説明
測定中のサンプルを中断	測定中のシーケンスまたはシングルランを中止する。
マニュアルコントロール（分析中）	機器が分析中の間、マニュアルコントロール機能にアクセスする。
マニュアルコントロール（機器待機時のみ）	機器が待機中の間、マニュアルコントロール機能にアクセスする。
MS オートチューニングとマニュアルチューニング	マニュアルチューニング、オートチューニング、チェックチューニングを含めて、すべてのMS チューニングおよびメンテナンス機能にアクセスする。
MS オートチューニング	MS オートチューニングを実行し、チューニングをチェックする。
すべての保留中のランをキャンセル	任意のユーザーが追加したランキュー内の保留中のランをキャンセルする。
自分の保留中のランをキャンセル	ランキューにある自分の保留中のランをキャンセルする。

付録

コントロールパネルの権限

名前	説明
保留中のランの順番を並べ替え	ランキュー内の保留中の分析の順番を並べ替える。ランキュー内でアイテムを移動。
優先サンプルの実行	優先シングルサンプルをキューに追加。
シングルサンプルの実行	通常のシングルサンプルをキューに追加。
CDS クライアントで機器コンフィグレーションを変更	実行中の測定クライアントから直接機器コンフィグレーションを変更する。 注記：この権限は、一部の機器ドライバー上でまだ使用できません。
アクセス要求	別のユーザーによって現在ロックされているシーケンス、ランキュー、または機器へのアクセスをリクエストする。
アドホックモード有効	機器に対してアドホックモードを有効および無効にする。
アドホックモードのオーバーライド	他のユーザーが有効にしたアドホックモードを無効にする。

表 9: カスタムツール

名前	説明
カスタムツールセクションの表示	アプリケーションに追加された外部プログラムをカスタマイズツールから開始する。

表 10: データ

名前	説明
データのエクスポート	OpenLab アーカイブ (*.olax) ヘデータをエクスポートする。
データのインポート	OpenLab アーカイブ (*.olax) のデータを OpenLab システムへインポートする。
生データのインポート	ChemStation または EZChrom、または AIA データ形式から生データをインポートする。
レポートの保存	レポートをディスクまたはネットワーク共有上のロケーションに保存またはエクスポートする。
サンプル情報の編集	注入リストウィンドウの情報を編集する。

表 11: データ解析

名前	説明
新規結果セットの作成	さまざまなソースのシングルサンプルまたはシーケンスを、自分で組み立てた新規結果セットに統合する。
キャリブレーションポイントの有効/無効	検量線の個々のポイントを無効または有効にする。
マニュアル化合物同定	化合物をピークへマニュアルで割り当てる。
クロマトグラムのマニュアル抽出	MS (TIC-SIM/TIC-SCAN) クロマトグラムをデータからマニュアルで抽出する。
マニュアル積分	クロマトグラムウィンドウでマニュアル積分を有効にする。
MS ライブラリの手動検索	マニュアルで MS ライブラリ検索を行う。
MS スペクトルデコンボリューションの手動操作	MS スペクトルデコンボリューションを手動で実行し、MS スペクトルデコンボリューション結果を削除する。
スペクトルのマニュアル抽出	UV または MS スペクトルをデータからマニュアルで抽出する。
積分の最適化：ピーク結果の表示	積分された各ピークのリテンションタイム、面積、および面積 % を積分の最適化に表示する。
Custom Calculation Editor の起動	Custom Calculation Editor をデータ解析から起動する。
マスター解析メソッドの更新	結果セットメソッドの変更を、メソッドフォルダー内の対応するマスター解析メソッドに保存する。
積分の最適化の使用	積分最適化のパラメータを編集し、ウィザードを実行し、ウィザードの機能を使用する。
データの再解析	注入データまたは結果セットを再解析する。
結果レポートの印刷	メソッドまたは結果レポートを作成する。

付録

コントロールパネルの権限

表 12: 電子署名

名前	説明
データファイルの電子署名	データファイルに署名する
電子署名の取り消し	電子署名を取り消す。
メソッドステータスの変更	サンプルプレップメソッド、測定メソッド、および解析メソッドのステータス（一般、承認済、廃止済）を変更する。コンテンツ管理付きシステムにのみ適用されます。

表 13: ファイルとフォルダーの操作

名前	説明
レポートテンプレートの削除	データ解析のデータ選択ビューで、レポートテンプレート (*.rdl) を削除する （プロジェクト管理 > プロジェクトのコンテンツの削除権限も必要）。
シーケンステンプレートの削除	データ解析のデータ選択ビューで、シーケンステンプレート (*.stx) を削除する （プロジェクト管理 > プロジェクトのコンテンツの削除権限も必要）。
メソッドの削除	データ解析のデータ選択ビューで、解析メソッド (*.pmx) または測定メソッド (*.amx) を削除する（プロジェクト管理 > プロジェクトのコンテンツの削除権限も必要）。

表 14: ロック

名前	説明
結果のロック	結果セットをロックして変更できないようにする。
結果のロック解除	結果セットのロックを解除する。

表 15: 解析メソッド

名前	説明
解析メソッドの作成	新規解析メソッド (*.pmx) を作成、またはメソッドを新しい名前で保存する。
マスターメソッドの保存	解析メソッドへの変更をメソッドフォルダーに保存する。
結果セットメソッドの保存	解析メソッドへの変更を結果セットフォルダーに保存する。
積分パラメータの編集	メソッドの 積分イベント セクションのパラメータを表示および編集する。
同定パラメータの編集	メソッドの 化合物 > 同定 セクションのパラメータを表示および編集する。
クロマトグラム抽出パラメータの編集	メソッドの 抽出 > クロマトグラム セクションのパラメータを表示および編集する。
スペクトル抽出パラメータの編集	メソッドの 抽出 > スペクトル セクションのパラメータを表示および編集する。
MS ライブラリパラメータの編集	メソッドの スペクトル解析 > MS ライブラリ検索 セクションのパラメータを表示および編集する。
MS スペクトルデコンボリューションパラメータの編集	メソッドの スペクトル解析 > MS スペクトルデコンボリューション セクションのパラメータを表示および編集する。
キャリブレーションパラメータの編集	メソッドの 化合物 > キャリブレーション セクションのパラメータを表示および編集する。
スペクトルパラメータの編集	メソッドの 化合物 > スペクトル セクションのパラメータを表示および編集する。
システムスータビリティパラメータの編集	メソッドの 化合物 > システムスータビリティ セクションのパラメータを表示および編集する。
カスタム計算パラメータの編集	メソッドの ツール > カスタム計算 セクションのパラメータを表示および編集する。
シグナルパラメータの編集	メソッドの 全般 > シグナル セクションのパラメータを表示および編集する。
サンプル純度パラメータの編集	メソッドの MS サンプル純度 セクションのパラメータを表示および編集する。
レポートパラメータの編集	メソッドの レポート > 注入レポート セクションのパラメータを表示および編集する。
一般パラメータの編集	メソッドの 全般 > プロパティ セクションのパラメータを表示および編集する。

名前	説明
古いマスターメソッドの読み込み	コンテンツ管理付きの場合のみ：古いバージョンのマスターメソッドを読み込む。
ポスト解析用プラグインパラメータの編集	メソッドのポスト解析用プラグインセクションのパラメータを表示および編集する。
一般ステータスの解析メソッドの使用	ステータスが一般の解析メソッドを使用する。

表 16: プロジェクト管理

名前	説明
プロジェクトまたはプロジェクトグループの管理	プロジェクトおよびプロジェクトグループを作成、移動、編集、または削除やプロジェクトプロパティを編集する。プロジェクトまたはプロジェクトグループの権限の編集はできません。
プロジェクトまたはプロジェクトグループのアクセスの管理	プロジェクトアクセス設定を表示または編集する。
プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示	プロジェクトとプロジェクト詳細を閲覧する。編集はできません。 注記：この権限はすべてのユーザーに必要です。
プロジェクトコンテンツの編集	新しいバージョンのファイル（データ、メソッド、またはテンプレートなど）を作成する。メソッドまたはテンプレートを削除する。
プロジェクトコンテンツの削除	データ解析のデータ選択ビューで、テンプレートおよびメソッドを削除してください。 コンテンツ管理付き OpenLab CDS の使用：プロジェクトファイルまたはフォルダー（データ、メソッド、テンプレートなど）を Content Browser ウェブインターフェイス経由で移動または削除してください。 注記：プロジェクトに含まれない Content Browser 内のファイルおよびフォルダーを移動または削除するには、別の権限が必要です。管理者権限セキュリティの管理が必要です！

付録

コントロールパネルの権限

表 17: レポートテンプレート

権限	説明
レポートテンプレートアイテムをロック/ロック解除	レポートテンプレートアイテム（テーブル、クロマトグラム、アイテムグループなど）のロックおよびロック解除を許可して、各項目をユーザーが変更できるようにする。
レポートテンプレートの検証	OpenLab CDS 以外で変更されたレポートテンプレートの使用を確認する。
レポートテンプレートの作成	レポートビューでレポートテンプレートを作成および編集する。

表 18: サンプルプレップ

名前	説明
サンプルプレップの作成と編集	オートサンブラのサンプルプレップファイルを表示、編集、および保存する。
一般ステータスのサンプルプレップメソッドの使用	ステータスが一般のサンプルプレップメソッドを使用する。

表 19: Secure Storage（Content Browser の権限）

名前	説明
チェックイン/チェックアウト	ファイルのチェックアウト、チェックイン、および自分でチェックアウトしたファイルのチェックアウトを取り消す。
ファイル/フォルダーのコピー	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage 内の別の場所へコピーする。
フォルダーの作成/名前変更	フォルダーを作成またはフォルダー名を変更する。
ファイル/フォルダーの削除	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage から削除する。
ファイル/フォルダーのダウンロード	<ul style="list-style-type: none"> ファイルおよびフォルダーのダウンロード ZIP 形式でダウンロード ファイルのプレビュー ファイル/フォルダーリンクの作成 ファイル/フォルダーリンクの使用
ファイルの電子署名	データファイルに電子署名を適用する。

付録

コントロールパネルの権限

名前	説明
ファイル/フォルダーのロック	ファイルおよびフォルダーが変更、移動、または削除できないようにロックする。
ファイル/フォルダーの移動	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage 内の別の場所へ移動する。
他のユーザーによるチェックアウトの取り消し	他のユーザーがチェックアウトしたファイルのチェックアウトを取り消す。
ファイル/フォルダーのロック解除	ファイル/フォルダーのロックを解除する。
ファイル/フォルダーのアップロード	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage へアップロードする。
コンテンツの表示	コア機能へアクセスする。 <ul style="list-style-type: none"> ログイン コンテンツの参照 ファイルのプロパティの表示 フォルダーのプロパティの表示 クイック検索
Storage Administration コンテンツの表示	ストレージコンテンツの閲覧

表 20: シーケンス

名前	説明
測定中のすべてのシーケンスを編集	任意のユーザーが実行したシーケンス（ランキューのステータスが 測定中 ）を編集する。
シーケンスの作成と編集	シーケンス (*.sqx) を作成、編集および保存する。
測定中のシーケンスを編集	自分で実行したシーケンス（ランキューのステータスが 測定中 ）を編集する。
メソッドをオーバーライドするパラメータの編集	定義済みの測定メソッドのパラメータをオーバーライドする。

表 21: シーケンステンプレート

名前	説明
シーケンステンプレートの作成と編集	シーケンステンプレート (*.stx) を作成、編集および保存する。

表 22: スナップショット

名前	説明
スナップショット結果のレビュー	測定中のサンプルをデータ解析で開く。

機器権限

表 23: 機器管理

名前	説明
機器またはロケーションの表示	ツリー内のロケーションを表示、アクセス可能。ただしアクセスセキュリティの編集は不可。プロパティを表示可能。
機器またはロケーションの管理	ロケーションの作成、移動とプロパティの編集（名前、説明など）。
機器またはロケーションアクセスの管理	ロケーションアクセス設定の表示および編集。
機器の実行	ユーザーは機器セッションを開始できる。
機器サービス	機器のロックまたはロック解除（サービス目的）。

管理者権限

表 24: システム管理

名前	説明
プリンタの管理	プリンタおよびプリントサーバーの追加/削除。
アクティビティログのプロパティの編集	コントロールパネルのアクティビティログの設定の変更（システムアクティビティログのログ記録をオンにできる）。 OpenLab CDS Workstation では、アクティビティログはインストール時にデフォルトで有効になっています。
管理レポートの作成	システム管理レポートの作成。
システムコンポーネントの管理	コンポーネント（アプリケーション）のインストール/削除。

名前	説明
セキュリティの管理	セキュリティ設定の変更とセキュリティロールの割り当て。 ユーザー、グループ、およびロールの追加、変更、または削除。 Content Browser ウェブインターフェイス：プロジェクトに含まれないファイルおよびフォルダーの移動と削除。 注記：この権限が割り当てられたユーザーは、Shared Services のすべての設定へのアクセス権を自分自身に与えることが可能です。誰に「セキュリティの管理」権限を付与するのかに注意してください。
機器コントローラの管理	コントロールパネルで機器コントローラを表示し、管理。
ロックされた UI をロック解除	他のユーザーがロックしたセッションにログインできる。

表 25: Secure Storage (Storage Administration の権限)

名前	説明
ファイル/フォルダーのインポート	ファイルおよびフォルダーをバルクインポートする。
ファイルストレージの管理	ファイルにアクセスし、ストレージロケーション間でファイルを移動させる（ファイルの再配置）。
ストレージロケーションの管理	ストレージロケーションにアクセスし、追加/編集する。
ファイルのロックスケジュール	ファイルのロックスケジュールにアクセスし、管理する。

表 26: アクティビティログのアクセス

名前	説明
アクティビティログの表示	システムアクティビティログにアクセスする（ログエントリの記録は影響されません）。

営業およびサポートのお問い合わせ先

お問い合わせ先

営業およびサポートのお問い合わせ先については、以下のウェブサイトを確認してください。

<https://explore.agilent.com/ContactUs-jp>

アジレントコミュニティ（英語サイト）

1 万人以上のユーザーが参加するアジレントコミュニティで、疑問が解消されるかもしれません。プラットフォーム技術によって構成された、厳選されたサポート資料をご覧ください。同業者や協力者に質問することができます。作業に関連した新しいビデオやドキュメント、ツール、ウェビナーで通知を受けられます。

<https://community.agilent.com/>

本書の内容

このドキュメントには、OpenLab CDS Workstation Plus（Secure Storage 付き）のインストール手順、コンフィグレーション、管理、およびメンテナンスの方法が記載されています。SubscribeNet からのライセンス作成とオペレーティングシステムの設定に関する情報も記載しています。

マニュアルでは、以下について説明します。

- OpenLab CDS Workstation Plus のインストール
- ソフトウェアライセンスの作成およびダウンロード
- OpenLab CDS Workstation Plus のコンフィグレーション
- オプションの手順
- カスタマイズ
- OpenLab CDS ソフトウェアについて
- システム設定およびメンテナンス

www.agilent.com

© Agilent Technologies Inc. 2015-2024
エディション：2024年11月

文書番号： D0028021ja Rev. B

